

Nº 93 / XVII

和文叢書

第壹卷



日記劇見全

大坂

圖書出版社發行

序

承平中紀士左守任滿歸京以文紀行傳  
至於今多變釋去概未得明昧今文政  
已丑番川長門介新作之解而安執武賴  
兼序之曰此等此當時乎常言流牙  
方士左守之紀之也料後世有為之注  
解者而多與長門介潛意百年後何知

其解之自來能得其意也雖然所紀者  
人事也宜亦可推知按史士左史以善歌  
稱其為人不可概見然當是時南海盜  
賊方起而仍任其國在任五六年矣則  
其間勳賊護民功績豈少觀記所  
敘吏屬依戀之狀可以知之矣而婦裝  
中無物可以各其意則其清虛之營私

又可知矣出如言賊之欲相報無也嘗  
被勳討故待餘官權而後復也道  
途艱苦如使而繞到京師供出崎  
冢白者舊宅荒廢自經理之乃能  
得歸也可見廢者之功也而其後官  
終拉本正以位僅為進一階也其在私  
家私貴門地彼以儒流孤立次軻其抑

鬱為如何哉而託其文詞優游恬易出  
以諧謔託之婦人之作以自晦其功勞而  
世故人情無不躍然於短詞之間其所以  
知其人物牛量不特善歌也抑唯其  
人如其歌之款也世之所謂歌人之自  
人歌自歌之與人事視為兩途出左守  
不然也如此記以常法紀帶事法舉

婢女喜子於師婢市矢口諷詭長短  
不齊而喜節之諧自然成於者豈能以  
世夫夫以款為款刻意飾詞夫夫者  
也邪其忠於古今集猶東於官命  
不免有礙於家無朝言之而集序所論  
豈本性情詞感萬殊其語雖聲一誰為其  
者已也與古今為今長門公亦以善歌名震

一也。吾察知其不可獨乃在教。此所以眷於  
注。解者。為他解。大者。為名。名外。於此。前。注  
者。之。所。或。未。去。而。其。實。所。謂。萬。世。猶。是。者。  
不。難。如。其。解。者。則。有。年。何。足。言。哉。義。儒  
生。也。曠。於。教。者。然。出。左。右。而。儒。者。不。可。專  
以。教。人。目。之。而。長。丁。亦。能。以。教。為。教。者。所  
以。徵。序。而。不。辭。也。

一也。吾察知其不可獨乃在教。此所以眷於  
注。解者。為他解。大者。為名。名外。於此。前。注  
者。之。所。或。未。去。而。其。實。所。謂。萬。世。猶。是。者。  
不。難。如。其。解。者。則。有。年。何。足。言。哉。義。儒  
生。也。曠。於。教。者。然。出。左。右。而。儒。者。不。可。專  
以。教。人。目。之。而。長。丁。亦。能。以。教。為。教。者。所  
以。徵。序。而。不。辭。也。







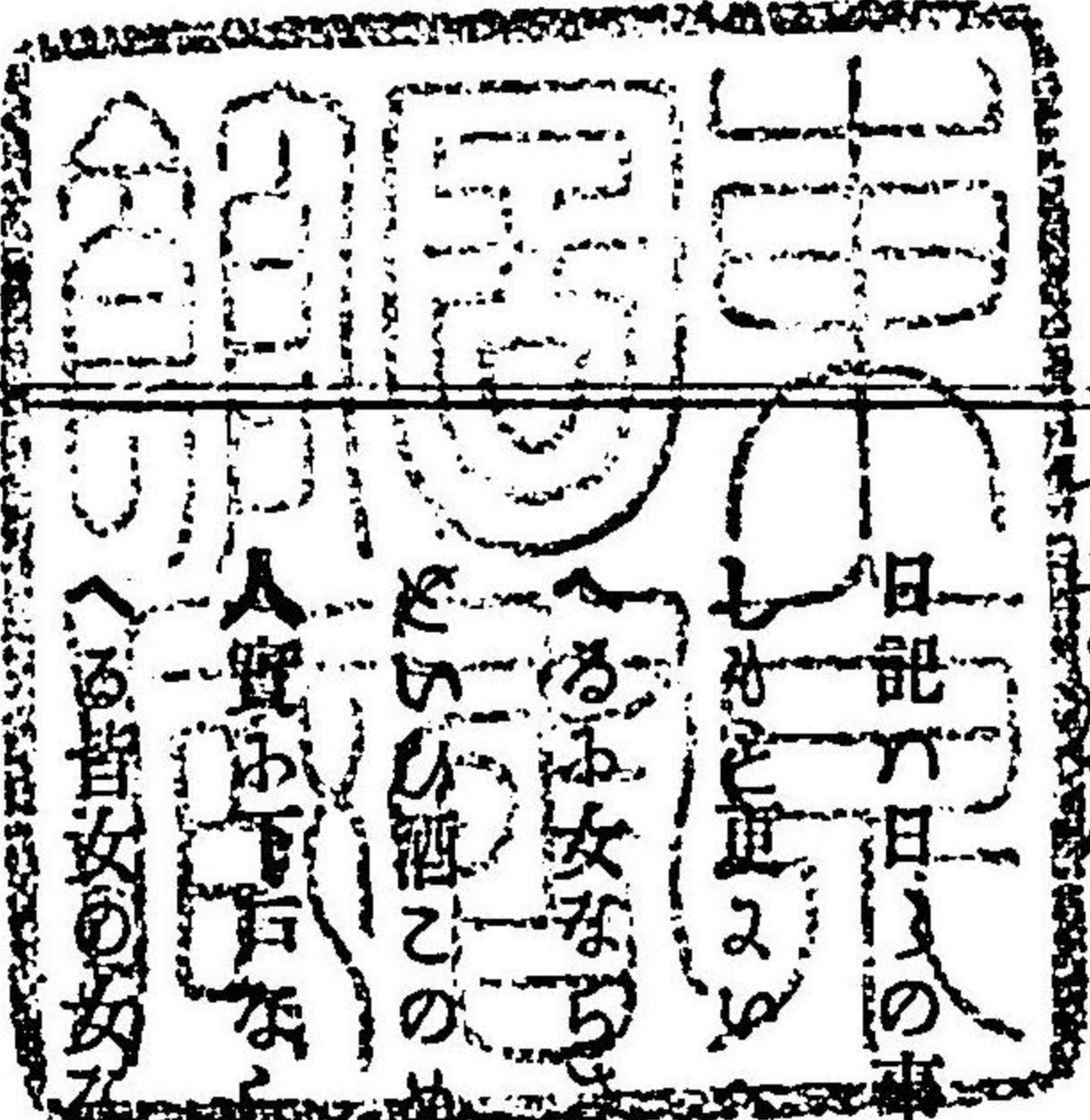


門紀氏の自筆を寫し給へるといふによられたれば大畧善本なる  
 べきものとされとそれれた古假字ならずが、術字脱文もまゝ見え侍  
 れを其原本紀氏の自筆也といふも又疑ひを殘すべきもの也

土左日記創見

どとこもずといふ日記といふものどとどんなもきてこゝろみんとて

するなり



日記の日の事をまゐるせるの稱ならん事名義あきらかなるへし男もすといふ日記と  
 しめと直とい  
 へる女ならん  
 事猶まゐるしたとへい年ふりたらん人のおのれ若けれとも老めく也  
 といひ酒このゆるか下戸に之あれとのみつへしきとはゝるみ興するに似て實に若き  
 人實か下戸なとん却てまかひいふへきにあらぬか如くかまへてわざとうらうへをい  
 へる昔女の女ならざるを見えしむるあされ也まこと女のさまに見えんとする中  
 かく男女のうへをまうけ出へきならず事さまめしうなたらかにいかにも有へしさ  
 りとも女のたえてさるわさすましき物ならんこそいふまかもそわり出め女あらんから  
 に日記かくましさいこれなくましてこの限りある旅の船路のすさみにして大やう誰

ももたしてのえあるまじき事也後ふもてとやす更科の日記十六夜の日記などいふもみな女の紀行なるをやこれらのさきふも蜻蛉の日記あり紫式部の日記ありこの普く人のえる所也此外にも女の日記といふもの擧るふいとまわらすきところ式部のもせし源氏の明石の巻にやかて御有さまを日記のやうにかき給へりなど紫のうへを書なせるにも女もそのほとくにかかして日記せし事のみ見るにたれりそのかみとても事情猶まからさらんやのされと引とりての男のかくべきも又あたるまへのわさされの今のまをらくさるかたによりてかき出たりともいへんものから猶男のすといふなる日記といふものさとうけたりてのかくすをさふもといひて女もすへき物のさまを打かすめたるなとかくに書まかへて畢竟まといけなきもの也さのいへ實に紀氏の日記なれの其文意文勢尤をしくしかも大やう自記の体裁あるをみすく斯もいひなせるのまを女にかくれて物せんとにのわらてたかと思ふ心ありて也けりかつこの日記の打まかせて俳諧なる事のみつ此發端の大とれたる調にも聞えるへしたとひ其意正しくとも其まらへたこれたらんのもとより俳諧也今のまらへも心もた

をや古今の序などの事から正しきにか打かひりてさしもあされくつかへりたる此記のすかたをいにしへ今に見える人なくまひておほやけさまの實録にときなさんとするより杜撰附會の説のみよして作者の本意干載にあらわれさるのあたらしきわなならすや

それのとしまひすのそつぎあさりひとひの日のらぬのときにも  
てすそのよしとさふものにさきつく

すへてをいもとよりの正記あらんゆつりて今のそれのとしなとおほめさても書り實の承平四年の冬也さるに却て廿日あまう一日のひの戌の時に門出すなど又委さに過て前後さらにひとしらすかつ戌の時の初更也さる夜陰にかとてすと打まかせていへるも實さまならずや戌の時とかくそても有なんをわさどまひてもいへるみなあされの外ならずもし是を實記と見んに御世の号のさら也其年なみをたふさるさすの何の日記するかひあらんよし語調のたこれたるをい見しる事えあらすともかく

ごわりの乱れたるに心をつけすの有へからふすそのよし云々の其船中歸路の事を書つけ試むと也これまてのししかきといふへし

あるひとあつたのよとせいつとせえてくれいのことゝもみなまごへてけゆなととりてすむたちよりいへふねにのるゝきとこるゝわたる

ある人の記者の女紀氏をさしていへる也大よそ某年某日また或人或説なといふものあるきをわさといとさるにて今も紀氏とも土佐國ともいとすしとけなきの例の也あかたのやく縣主縣召の稱さへ有て大やう諸國の官府をさしていへりと聞ゆ今もあかたの任限よとせ五とせといふ意也又古今にあかた見にのえいてたゝしと書るの三河の國見物にのといふとかりの事と聞えてそのかみつかひあふせる世にの大やういかにも用ひけんあかたの其本公田より出たる名ならんもとより公田の霖旱にあひても損傷なきいとゆる高田袴田の偏地にあらざる廣平の良田なるへしとさるの即ち安

田平田にして皇神皇君のきこしめす御料あらんの変更也さるの水口新掌をさ殊さら  
に仕へまつりて崇まふより上田といふへし即ち俗にいふ上田也もとよりあかひるあ  
かまへも上様上延の音便にて尊貴の稱なる事論なし山城の縣の井戸さともいにしへ  
公田の井にてわきて清泉なりしより名つけそめけんさてるの任限の四年なれとも延  
長八年にくたりて今年承平四年まで前後五年をかけたれいふさねて四とせ五とせと  
いふ例のとの國守交替の定まれる公務あるをいふさるをなし終りて官税等とてこ  
はりなくすめるよしの文書を後任の人より受とるを解由をさるといへりすへて委し  
き事の合式などにつきて見るへしさて住なれし館をの新守おゆつりてまつ船中へう  
つる也船場のはとりに假のむろつみしてまをらくとゝまをる事にやとも思ひしか  
と然らす後に船に乗せめし日よりといへると此廿一日あつたれ此日すて乗うつ  
りてさて大津に船やどりしてあられし也とてゝをへてとりていてゝとて文字をたゝ  
みていへるの古文の常也  
かれこれとるさゝらぬたくりすとしころよくくしつる人となんわか

たれがたく思ひてとぎりにとめくまつゝのしるうちに夜ふけぬ。

まゐる人も見しらぬ人もかの船場までほとくにおくりすといへり中にも此年ころめしつかひれてまたしく出入せし人々のふたゝひ逢まじき別れを惜みてさうかてにせし也調度やうのもの或の船につみとこひかつ離盃などとりくまかなひさまくをまきりにのしるといふ夜に入てうつられたれはやかても更たるへし年ころよく具しつるとほこりていへるの例のあされ也わかたれかたくの諸本わかたれかたくとあるに隨ふへしこのとかれと云る古假字のなたらかなるをわかたれと後又書あやまてるもの也やかて次にわかたれかたき事をいふわかたれかたくいひてなどあり

廿二日いつみのくにまでとたひらかにねかひたつふちいらのときさねふなちなれとうまのえなむけすかみしなむまも思ひあきていとあやしくとほうみのほとりにてあされあつゝ

もとより都までつゝかなからん事を思ふのさらなれとまつ和泉の國までとさし定め

てそれまでたひらかにと願ひて船出すといへりかしこよりの畿内の地にして賊難のおそれなけれの也たひらかにと願ひたつと有へきと文字を省けるの上のと文字間ちかくいゝきて自然其意又聞ゆれの也さてこゝにねかひたつとかけるは大きくりをいへるにてまとの廿七日に船出せられしよし次に見ゆ此日ときさねといふ人餞せし也馬にのりて出たつ旅ちらぬにうまのとなむけすと興せり馬の鼻向のもと旅たつ事にて馬の鼻を行ささへ引むけていつるをいふ門出といふ又同意也さて門出も馬の鼻向もいつれ旅たつ事あるに餞するのみを馬のとをむけといふの馬の鼻向の祝をといひけんかえふかれたる也中ころよりいよく言をさてたゝ鼻向とのみさへいへりさて後旅たつとを門出といひ餞を馬の鼻向と呼わかちていひあらへるもの也又馬のとをむけを餞すると字音にてもいへり今も餞別といふかみしなかもあひあきての諸本かみなかしもあひあきてと有に従ふへし今ひし文字の所入たかひし也かの船場にてみな酔すくして戯るゝをいへりそのかみ魚肉の腐爛せるを饒アキるといふそれを人のあされみたるゝにかけたなりその魚肉の盛をくゆれぬあされさる物なるお人の

さるうしほのはとり有てあされわへりといふ醉態の常にかりれるを汝海なからあ  
さる一方にもかけていとあやしきといへり

廿三日やきのやすのりといふ人ありこのひとくにかならずしも  
いひつかふものにもあらずなりこれそたしきやうにてうまのそ  
なむけしたる

けふまた八木のやすのりといふ人餞せし也この人國又ありての身から重き人にてか  
りそめの課役などにかならず召出てつかふつらの人にもあらざる也といふされ餞  
のさまもさすかに禮を盡して昨日などの打とけてあされし類ひにわらぬを是ぞ正  
しきやうにてといへる也

かみからにやあらん國人のこゝろのつねとしていまいとてみえず  
なるぞ心あるものいえずそなんきけるこれハ物によりてほむる  
にしもあらず

國人の云ふこの土佐の國人のみならず大やう國守に従へる國人の存さまをいへり  
任國のあひたの頼おもねりてきたり物せし人も任とけて歸らんとするさのに至りて  
の今のとて見えこそなるか國人の常也さるにやすのりの如き心ある人のさるへき禮  
義を守りて家からなと高ふらせ同し列にも立となれ更に恥すして來にけるといふも  
とより恥へき事ならねとさる心なき輩の大やう恥辱とせるかたをうけて書るの例の  
筆也さてこれの國守のをさめの正しきからやわらんと記者の譽るになしてはこり  
ていへりされの守からにやあらん心あるものといふにかゝれる也語勢みるへし  
此守からを人ら日からなと体言にいふからと意得て濁りてよむ説のとられすこの  
吾のら心からなどのからに同じき用言にて守より守ゆゑといふ意とへなれの濁るへ  
き又あらずからをすますしてのにやあらんともうけられぬ事也又かやうにやすのり  
を譽るのかならず餞のたまものよきにつきてのみはむるにあらざと重ねて穢れい  
へり恥すそなんのそ文字諸本のなきに従ふへし

廿四日講師うまのはなむけしにいひませりありとあるかみしもわ

らばまてゑひまれて一もしどたにまらぬものしめあしハ十もしに  
ふみてそあそふ

講師のそのかみ國一箇の國分寺ありてその職を講師とよふ紀氏の尤佛歸依の人寺  
れの殊さらにはたしめ交とられしあるへし次にも再ひおくりものあり講師といふよ  
りいてませりと敬ひて書る也ゑひしれの醉ておろかしうなるをいふかもとにて或の  
醉狂ひ或の酔くつれて正躰なきをいふ手してハ一文字を引とらぬものも足の踏ま  
しへて十文字になしてたしろきたるゝ也足のといふに手を思とせたるなどすへて  
文意簡易にして其滑稽のみやひたるのさらにもいとす講師の入來といふより文字し  
らぬ者も文字をなして遊ぶと書せるなど殊におかしき也意を用ひて見るへしこの  
下さまのものわらのなどをさせりさて一文字十文字ハ一の字十の字といふ意にて字  
の形をいへるなれの仮おもひともしともしなと讀となかれざるは字の數をいふにな  
りてこゝにかきはすものしかはものかといふにし文字をくハへて語勢をつよめたる

當時の平言とみゆ岸本由豆流か考證にうつは物語國讓にいかにかれしかためにうれ  
しくさふらのまはしく侍らんとあるを引りこれも是か爲にといふをこれしかためと  
いへる也

廿五日かみのたちよりよひにふみもてきたりよはれていたりて日  
ひとひよひとよとあそふやうにてあけにけり

今の土佐守の館より紀氏をよふ也此文の類ひ事からの正しといへとも猶その調のた  
えれたり又とさまたのれたるに却て調を正しきもの多しそれはたやかて滑稽のいみ  
まきなるを聞知べしさて長曆もて推すに此廿五日は節分にわたれりさるは大よそね  
ぬへき夜ならねばさる方にとりそへて夜を明せる也年ころ住かれし館なれの外さら  
ずおはえてまろうとこゝちもせて打とけさゝめきて明されけんをあそふやうにて  
いへるなるへし

廿六日なほかみのたちにてあるにあふしハのしりてどのこらま

てにものかつけたりからうたこゑあけていひけりやまとうたある  
しもまろうともこと人もいひあへりからうた、これにえがくす

宴ウタヒわかしてけふも猶館にありといふあるし、之饗の字などあて、今もてなし馳走ふ  
りきといふか如しさるの賓客を對して主人かたのするわざなれのあるしわざと  
いふへきをあるしすといひあらへり諸本たちにあるに有從ふへしのしりのもと  
こめたかに口ときをいへる語なれ、こゝにての酔みたれて言ははきさま也上にもま  
きりにとかくしつゝのしるゑあり轉りての勢ひつよき事おもいへりさてまろうと  
のさらにてまろくまでほどく物かつけたりといふかつけもの引出もの也をの  
こらの紀氏の下男をさす枕草紙をそこ主きとわろくいふいさわろしきとわりてそ  
のかみをのこともをそこともいふ今も下男下女をのをとをなこといへりさて詩の  
朗詠し歌いたし讀むけたるへし詩もたれその作れる也古詩ならんにのれまかせてこ  
れおえかくすといふへからぬこゝちす詩のみな正記にゆつりてこゝにのせざるを

女なれのえかゝぬふりに書なせり新守の館にての事とも女のあるへきならず又よの  
れて至りて日ひと日云々々と女のいふを聞えねともとより紀氏のおのか書るをかく  
すにあらぬのかくことわりの行たかへるか多きをも又あされの一ふしとせられたり  
あるしをさきひひてまろうとを次にかけるの紀氏の自記されのややなといへるの  
中と也このたし語調にまかせたるもの也

やまとうたあるしのおみのよめりけり

みやこいて、きみにあはんとここのものぞこゝしひもなくわかれぬ  
るかな

あるしの守と今の土佐守也歌の意明らけした、紀氏に逢んをこゝろとせしとよめる  
にもかねてまたしき中まられたり

となんありければおゝまのきのおみのよめり

まろたへのなみちととほくゆきおひてわれよにへきいたれならな

くはこと人々のもありけれとさめしきもなむるし

歌の意はるくの浪路をゆきかひり来て我身お似んのやかて誰あらず君にこそあれ  
とさしむかへる公務の勞をれのれにわてゝまたしみいたとりてよめりたるたへの浪  
といとん枕詞ゆきかひの往交ユキカヒにて我と人とゆきかひるをいふたゝささの守のよめる  
といとてかへるささの守とを更おかけるの今漕出んをいひて歌のゆきかひてとある  
をたしかお聞せたる也紀氏の歌に花鳥もみなゆきかひてぬと玉の夜のまふけふの夏  
の來にけりとあるも花鳥と夏とゆきかひるをいふ古今集にもたのしみ悲しみゆきか  
ふともと書れ夏と秋と行かふ空の通路のとも有に同じまた往反るをゆきかひといふ  
も常なれと今のまからさる也見わくへし誰ならさくおのならぬといふをつよめてお  
とねしたるなれの誰ならずといふとかりに意得て語勢大やうたかふへからす此外人  
の歌有つれと書出へさはどのよきもなかりしといふをおはめきて書り

とめくひひてさきののみみいものももろともはにたりていまのあぶし

ささきのもとりかひしてゑひことにこゝろよけなることとしてい  
てにけり

前の守今のもといひ又今のあるしも前のもといへるかたへのも文字をとよきて對句  
にして對あらさらしむるの紀氏の文法也おのれを前の守といひ新守を今のもといひ  
て又新守を今のあるしといひおのれを前のもといへる筆つかひたゝならんやかつ前  
の守にあたりてあるしをさへ前のもといへるのやかて俳諧なるを見えるへし階を送  
りくたりてさてかたみお手とりくみてものせるの古へ人の直情にしてかへりて敦厚  
なるさま見ゆめり今もへたてぬ中のわかれにのをりくする事おてとちれかたき悲  
みの心をせめてもやるまのさ也何のあれどかくはかなたちてわりなき事をのみわな  
くういへるを此記の心とすまかをさなき事醉のまされにすへきなれのゑひとにと  
いひて有さまをもこめたり心よけなる言しては首途の祝言也まか快き歡ひをのへん  
の却て醉のすさひにて心にもあらぬか哀なる也さるの只わかれの遠さのみならず群



盜さきくふみちて此ころ殊々物騒の海路なれの命をめてはるく渡さるものせられんうき旅の離情いかお物とかなく悲しとも悲しかるらん思ひやりつへし

廿七日おぼつよりうらとぞとてこきらつむくすうちに京にてうまれしどんなこくににていかにうせにしめはこのころのいたちいそきをみれとなにともいはす京へかへるにどんなこのなきのみそがなしみこふるある人ともえたへす

京にて出生の女子此ころ俄に失たるお何事もおはえずといふかくするうちよとの歸京用意のうち也とさらに京にて生れしといへるおやがて出京已前に生れし事まらるとく生れしならんに然のとわるへからすされ今年五六歳とかりの女子よて紀氏六十八九歳の時うませられし也かく老ての後の子ならんいとはしみのほと思ひやるへし國にてハ土佐の國をいふ京に對へて諸國をいた國といふ事常也上にも國にかならずいひつかふものおも非す云く國人の心として云くなといへりさてうれしかる

へき出たちを見れと嬉しといさむこころなくさる心なけれのさるかたのいそきを何事もせず只痛いけに育てしを都へつれかへらんのあらまし俄にたのひける事をのみ悲しみ歎くの外此ころのわさきしと也ましてその亡跡にさへ離れゆかん今日のかとて思ひやるへしさるの親ならぬ人すら其かなしみにえたへすといへり女子のなきのみをそといふへきをのみそといへるの古言也何事もいとすの何事もせそといふ也前にもつかひなす事をいひつかふなと大らかにいへりすへてみるさくいふなすなといへる詞を視聽云爲のうへに定めわかれてさのやかに物せる事のかへりて古のふりに非ざる也そもくかゝるいそしき中にわさとして此日記書れつる事ハ此愁歎のいとせめたる心より起りたふんに此ふしををろそかに見るへからとされのそこらに至て其文さらにわされと敷言のうちにくそとくの悲しみこもりて千歳の末を泣しむるにたれるもの也

このあひたにある人のかきていたせうた

みやこへとたれもふもものゝかなしきいぢへらぬ人のあれはなりけり

すへて此のひたにといふものかみ中間事を起すの語にて必其のひたをさすもの非す今も悲しみこふるのひたにといふにてもなく人のえたへぬのひたにといふにもあらざる也次に此間よそやくの守の子云々此間に事多かり云々此間に雲の上も海の底も云々此間につかこれんとてつきてくるわらひ云々此間に風よけれり云々この間ふ今日の宮のうらといふ所より云々此間に和田の泊のあかれの所云々とある引つとへて知へし家集にも源の公忠朝臣のもとに此歌やりける此のひた病おもくなりけりどわり按するに中昔の頃より去程にといへる發語あるに似たり是も上をの受るこゝろなるものからさあるほどに其時をまかとさすにのあらぬ如しいとかるさのさてかくてなといふにのよへり又かゝるのひたにといふのひたに或の行のひたにくる間ふなとあるひたすら上よりつらなれる間の語も大やう此意のへ也意得かくへ

しきりのへ其間をささしていとんもよとより此語の本意ならんにいたましくいかてあらざらん去程にもまかあるほどに語意のまゝに聞えん事あらんも論なきか如し泥む事なかれ今の俗文にも大切の品に候間心を用ひられ云々承候間御事申入云々あどいふ間の詞其意をへ遣れるに似たりいふしへ故の語のかくあれの容ふて今かるかゆゑにとよむに同意なるものか又かくてさてあといふへきいとかるき發語にも故とつかへる事少からぬ此間に去程に又候間などもみな似たるものにて今古かしなへて大やうのりるへからぬ言語の自然也かし歌の明らけし都へと思ひたらんはともうれしかるへきになは物の悲しきいたゞ獨かへる人のあるゆゑ也といふまたあるときにい

あるものとあすれつゝなほなき人ぞらつゝとふそかなしかりけり  
又あるときつゝ猶いきてあるものと思ひてつゝに往て見えぬととふ

あるか悲しき也詞書より引つゝけて聞へし上の歌をうけて又ある時と入れぬ  
これも同じ或人にて紀氏也

といひけるあひたにむこのさきといふ所にかみのはらからまたこ  
と人これかれさげなにもしてたひきていそにたりめてわかればた  
きことといふかみのたちのひとくのながにこのくる人こそこゝ  
ろあるやうにいそればのめく

これよりの立もとりて又けふ廿七日の事をいふかくするうちに京にて云々といへる  
より歌まで今日發船する此國のわかれにつきて此ころの歎きをとり出て語りつゝ  
けたる也といひけるあひたにといふ此はとの事ともを立かへりまかゝといひけ  
るあひたふといふ意とこゝろ得へし守のとちから今の土佐守の弟あるへしこれに  
猶こと人もたくひ來れる也此人この鹿兒の崎までまたひ來て其磯におりあつてもて  
來たる酒肴をとり出て離別の情を盡せり今守の館にてハ此追來たる阿三燈のみそみ

やひある方にいそるゝといふこの心あるハ風雅の心也倭物語に此在次君心あるもの  
にて人の國のあこれに心ほそき所にてハ歌よみて書つけなとなんしけるといひ伊  
勢物語になまこゝろある女者とあるもなまくのえせうたきとよむを思とせていへ  
り今も歌よむ人をいこゝろある人といふゆり前にこゝろあるものハ恥すなんさける  
とあるハ道義の心ある也混すへかゝらすまらへにつきてわくハき事いふもさら也やう  
にいそればのめくといさるかたふはのく聞えたるにて世にいひたつるといふまで  
よのあらぬ心にくさかたをさかせていへりされハ留別の歌あるハ此兄弟の人のみ也  
さてこそ紀氏のことさらさる友なりけらし後に大聲の歌われとさくにたらず

かくわかればたぐいひてかの人このうちあみももろをちにてこの  
うみへにてになひいたせるうた

さしとれもふひとやとまほとあしものうちむれてこそわれいさ  
にけれ

かく遠きさかひにて心ある友と逢ふあへす引わかれんとする情思ひやるへしもろ  
とちの諸本もろもちとあるを従ふへしさてくちのみをさしめて當世の諺也たとへ  
今の世にも辨をめぐらし人をそくろかすを口車にのするといひ目たれを見こみて得  
手にとむるを目壺におとすといふさとのたくひにて詞を巧みにして人とくひる事を  
口綱よかくるといひけんさるを海邊のゆかりに思ひよせてさしもおのく打むれ來  
たりをしと思へる諸心をつらぬ出て引とくめんとするこころの歌を綱子とくへて  
綱引もよほす置かまわさになすらへて諸持にて此海邊にて荷なひ出せるなといへる  
尤興ありされの此一首たれの歌とさし定めぬに似たりさてくちのみもといへるのま  
その綱よわたりていふ歌の意の明らかし昔鴨の打群ての枕也

といひてありけれいといたくめてくゆくひとのよめりけるさぞ  
させとそこひもさらぬわたつみのふきき心ざきみにみるかなとい  
ふあひたにかちとりものあはれもさうてれのれしをけぞくらひ

つれいはやくいなんとしてさほみちぬがせもふきぬしとさわけい  
ふねにのりなんとす

此いたくめてく専ら歌からをはむるにあらす人このころさしの深きかたを感せ  
る也返歌の意すなりちまかり附注に此うた季白か注倫におくる詩の桃花潭水深千尺  
不及注倫送我情といふにかなへりといふ或説に續古今忠孝の歌に深けれと千尋  
の海もそこまりぬ人の心そ棹もねよとぬと有に似たりといへりそこひのそここのみ  
いふにこころのかはらすそこひのひのもとの標の約めにてそのかみそこひともいへ  
り今俗にもそこひのまねぬ人そこひを打明てなといふめるの古言也楳取のこのかさ  
りなき悲しみを見まらすしておのれとち酒のみをへつれりやかてとく漕出んとて汝  
みち來ぬ今風も吹出ぬへしとや乗給へと催したつる也さるのわたれるまへのわざな  
れとわざともかくするやうにおほゆるのかかるときの情なるへしさて心よりれのれ  
し酒をくらひつれりなとにくさけにいひなす例の文也れのれしものをつよむ

る語にてかたへをかへり見ぬ意ありされいおのれのみといふとかりにあたれりいな  
んゆかんといふに同じされと語のもとゆかんの向ふさきにかへりいなんこ  
をさるといふ

このどりにある人ゝどりふしにつけておらのうたともとときよにつ  
かほしきいふまたある人にくになれとかひうたなといふ

このをりに乗出んとするをりに也ある人ゝの送り來てある人ゝ也折ふしにつけて  
の即ち此わかれのをりにかなふ事にてやかて下に時に似つかのしさとあるに同意な  
れどこのまらへにまかせてとわりをいたとらさる文の常也抄云唐人の陽關などうた  
ふやうに餞別のをりにかなひたる古詩を吟したるへしといへり甲斐歌の古今集に二  
首あるうちかひかねを根こし山こし吹風を人にもかもや言つてやらんといふ方をう  
たへるにて前後の文の風のゆかりも道にやとも思えるれとさへわまりに入過たるへ  
し古今にのよくとゝのひたるを撰てとられたるならんにの猶外にもかひ歌有へき也

されいづれにても猶よくかなへるを誦ひつへしさて西國なれとゝ例の興せり  
かくうたふにふなやかたのちりもそらゆくくももたゝよひぬとそ  
いふなる

かくとりく悲しみうたへるを往昔虞公かよく歌ひて梁塵を動し秦青か悲歌して行  
雲を過めし古事に思ひよせたり塵のうこき雲のとゝまるうらうへのさまを一つにた  
よひぬとよさねうけて其とわりをかなへたるはたらさのいみじきのさら也塵も雲  
もといへるに乗出る船の別れかねて涙をしも思ひしめたりさるの秦青か薛潭を郊  
衢に餞して悲歌せる事をふみて離れかたき至情を形容せるものなれに其意専ら行雲  
を過めしにありて梁塵のかたの軽く見へきに似たれとこれた船やかたの塵もとま  
らへかへたるに船中振ひこそりけん其哀聲今さへ耳にあるこゝちせるの實に千古の  
奇文といふへしたよひぬへしなといふへきをこそいふなるとたしかに書るの例の  
にてありあふ人のいへるになせり同じ餞する人の中にも送るこゝろさし受る心とへ

淺深あり親疎ありて一つならざるけちめをわさやかにみせてかゝれたるを編首にいへる如く此記の意にして紀氏の意にあらす源氏の賢木にかやうなるをりのまはならぬ事かすくゝに書つくる心なきわさとか貫之かいはめたるゝ方にてむつかしけれのどゝめつと書たりこのかくの如く酔みたれて眞顔ならぬ時などのすへてまどけなき詩歌などをいつとく書えるしなとせん心なきまめさ也と貫之もいさめおける方のまれわさなれいとい書つけんもむつかしくて筆をとゝめつといふ文也たうるゝいたるゝにてさる事此日記などのふりにされかさに書れたる書などありしなるへし今傳ふねいもとよりまかどのまふれねと人のさかなといとん事をの好まれさる紀氏の人からをのこれえかりにも見るによしあり猶此ぬしの慈愛の情ふかゝらんをの全脈につきてうかゝふへしさて此人ゝの紀氏の舊知己にしておしなへなすされいわかれた事いふといひかくわかれたくいひてと二所までかさねいひ歌にも達しと思ふ人やとまると云ふなどいへるを見るに今日二日のとわかぬ心にいひこしらへてとゝめし也其くちゝにいへるを口綱もゝろもちになどされとみて書

るみな別れかねたる限り見えたりこなたの歌も深き心を君に見るといひとこかりもあらまほしさに機取のいそくをさへかへりて心なきものにいへりさて國人の類みならねの此人ゝの名のみ省て書れさりし也さるゝ親しさのあやりにてもとより守のちらからとさへかけれの當世誰も知たる交りなるへしさらの今も聞えし名なるへきをそれかとたにえられぬの惜むにたれり既に古今集の作者なる酒井の人眞など當時の人にて土佐守なりし事大和物語に見ゆれ其あたりによとも思へど又仲實朝臣の古今目錄に人眞の此國守たりしの延喜十四年とあるせるかまとならたかふへきにや考ふへし

こよひうらとにとまふるふちいらのときさねたちいなのすゑひらこ  
と人ゝねひきたり

廿八日うらとよりこきいてゝねほみなととおふこのあひたにはや  
くのかみのこやまくちのちみねをけよきものともとてきてふねに

いれたりゆく〜のみくぶ

かふといふの物に物のつきかさなる名也それより物に物のつかんとするをもかふといふ猶物に限らず名にかふ恨をかふなどの類みなまかり負帯追などの字をこもくやどいつかふにも大やうをえるへし今も大湊を心さして舟をつけんとするなれんかふといふもとわりなきにあらねどさきの動さうつらぬ物をさしてかふといへるをいまた見ぬこちすされど萬葉卷六の長歌に吾者叙追遠杵土佐道矣とあるなと今に似たり又常に追手といひて風の船をかふの論なしさる風を便りに漕行よりやかて其おとるゝ船のゆくらんさきをかふともいひならへるにや尋ぬへしとやくのかみの抄に紀氏より以前の土佐守の事也彼前司の子千峯といふ人國にとまらぬたるにやと云りさて此人船中のなくさめにとて酒其外のためもの持せ来てかくり入たる也さるの猶浦戸にありての事なれんさて漕出て後ゆくゆく物せられし也

廿九日にほみなとにとまれりくすしふりはへてとて白散さけく

はへてもてきたりこゝろをいあるよにたり

この在國のわひたつかへたる國の醫師なるへし元日にものすへき屠蘇白散に其料の酒をさへ加へたる船中への心つかひ懇切のさまなれん志有といひ又醫師の樂もて來たらんわきて心いれたるわさにもあらさめれん似たりとうけたる味ひをかしみわりやすのりときさね守のころからなとに引くらへて見るへしふりとへんついでならずめさわさ來たるをいふ也ふりの事をつよむるの發語への長く引たるの稱なれんかたへをかへり見す一すちにむかふさまよりいへり屠蘇をどうそといふのと文字を引のへて其言のまらへをなすにて富貴をふうさ女房をにようほうといふ類眞字のみならず假字にてもたへをたうへまけをまうけなといふ常の事也

元日おほねなしとまりなり白散とあるものよのまとしてふなやかたにさしはさめりけれいかせにふきあらしせてうみにいれてえのますなりぬいもしあらめいばかためもあしかうやうのものもなきく

になりもとめしむれぬす

よへの白散をある人のわつか夜のまの事也とてとりあへず船やかたのとしにさして  
さみねきたれと夜一よ汝風ふきくつていつか海に明落してあたら白散をえのますな  
りぬといへりこれもある者の危忽をかける例の筆つき也吹ならずの吹馴るにて吹か  
うへに吹て風のまゝになすさま也それを風にならさせてといふの彼或者のまかなさ  
せたるを云きて白散をうしなへるの更にて幸も滑海藻も餅もなければ年の始をいと  
ふへさかたもなしとわひたる也いもしの諸本いもとあるに従ふへし今いもくと  
ゆりてかけるかいもしとなりたる也抄云幸あらめなど今も元日に用るもの也附注に  
延喜式大膳下正月最勝王經齋會供養料芋六合滑海藻二両二分と書りすへて正月の式  
に用ひし事と見ゆはかためと年の始めに物くひ初るをいへるかもとにてさるの専ら  
餅飯をいへふより餅をむねとふなる事とのなれる也今下さまに至るまで鏡餅に向  
ひ雑煮をいへる事をいふむかし打かへして餅鏡といへりさるの物のとしめに喰固  
めて齒の落さらん事をいへるにて水を若水とくみ茶を大福とたてとふきなすた

くひにて定まれる元朝の祝言也齒の文字につきて齡の事也などいふ説のいふにたら  
す齡を齒といひてかなとんや又齡を固むるといふ事有へけんや思ふへし門人山科元  
幹云齒固の麩菫の稱也玉葉の承安三年元日の條に當腹之小兒爲令戴餅云と民部  
大夫兼定取餅件餅入ニ手宮蓋一敷ニ檀栴一有ニ桶井齒固一とわり又玉葉の承元四年の元日に  
有三威橋三小兒戴餅事云と以餅三度當頂了則以蓋返給女房次取餅觸見頂上長押打

揚枝井九也次第如レ此三度次取大根觸見頂上云と此大根をとるとある玉葉の齒固云

とと同式に用ひられたるに齒固の麩菫なる事を知へし延喜式西宮記又江次第内膳の  
齒固等第一に大根をこそ擧られたれ式西宮記等すへて餅なし江次第御厨子所より調  
進の齒固に見えたるのみされの餅をむねといへるの後の俗か麩菫の四時に盛育して  
世に功能多きか中に口中の壞爛を治すといへり又今俗獸肉を喰て後必麩菫を食する  
も其齒牙のゆるやくを固むる也これ齒固と稱するにたる物也といへり此説乘難し枕  
草紙にえせものゝ所得るをりの事とある所の第一に正月の大根とかけるこれ齒固の  
時の事にて尤當時も取之やされしと思ふにたれり又幸滑海藻につらねたるも大根



めきて聞えざるにあらすこれによりて再案するにもどの元朝に始て物くふ事を齒固  
 といひしを後に式とまでなりゆくほどにくさく物の具たる方より實に其齒を固む  
 るものをしも加へ供しつらんかつひにその實驗わらんこれ其名を取たるなる  
 へき又次の章に引たる保憲女集にて見れと鮎も餅もひとつに齒かためといひしに似  
 たりさるの中にとある一物をさしてもいひ又もとにかへりておしこめてもいへり  
 しにやかつ散木集に齒かため鏡のをしきのまき物に書付侍りけるわれそのみ世に  
 もうちひのかみ草咲さのえたる影そわかへる伊勢に侍りける比宮の御をかためま  
 かてたるを見てよめるます鏡思ふさまにてうつりけん君か御影の名殘をそみるなど  
 あるのもちひ鏡なる事論なけれの餅をさしていへるもむけに後の俗ともいふへから  
 すいつれ後哲のさたをまつへしさてこれかかりの物もなき國也と船のすまひの事た  
 らとぬをやかて國にしもかけていひ落せるの例のあされ也今も家の内のまとしきを  
 不自由なる世界などたこれいふ意へに似たり實に幸わらめさらにてもちひさへ  
 なき國わらんやの求めしもわかすといへるの元日の料にとてもとめ來もせさりしと

いふにてその求むる所の土佐の國よりの意なれりやかて又船中の事のみとまるさ也  
 かくさまにまどけなきか此日記のすかたと知へしものとめわかすといふにし文字を  
 くとへて其語の上まるより殊さらにといふ意へこもる事也

たしあゆのくちどのみとすふ此すふ人々の口をたしあゆもし  
 れもふやうあらんや

鮎を歳首に用ふる事の彼鮎子立春の日より始て流れに向ひて逆上りつひに下る事な  
 きものなるを祝ひてなるへし年魚の名によれるにのわらし幸わらめのもとよりにて  
 屠蘇もなく齒固さへなきをうけてたし押鮎の口をのみといふたまし押鮎のみあり  
 し也口をのみすふの乾魚の頭をたうへるさまを見てて例のあされいへり門人三宅  
 意誠云公事根源元日節會の所に腹赤の贅とて魚を筑紫より奉る也云と腹赤の食やう  
 とてくひさしたるを皆とりわたして食けりとわり恐らくこの押鮎も其ふりにて一  
 魚の頭をのさくくひめくらすなるしと云へる然るへき西宮記云正月元日早朝

供奉塔蘇御膳事猪突二盤一盤 一焼 押鮎一盤切盛盤二 頭二串 煮鮎一盤同切盛二 頭二串 となり江次第も

これに同じこの切盛置二頭二串とあるにつきて今をも准へ思ふにたゞ押鮎の頭之の  
りを物せしならんさらの口を吸といふによしあり考證に賀茂保憲女集云かしらまろ  
き翁おんなどかためとおはしき事をいひとめてあゆの口をうつくしみ影のうか  
ぬもちひの鏡として云とあるを引けりこれも鮎の頭をくひて祝ひ物せるをうつく  
しみといふなるへしわきて鮎口かちなるものなれり頭といとて鮎の口といひ口と  
いふよりすふといひなせるいみしき滑稽也まか人のすふ口をおし鮎もし心有て思  
ふやうわらんやまられすといふざるは其人よにすきすかの擇ひありてあるのうるさ  
しともあるのうれしとも思ひなすらんと男女の中にとりていへり  
けふいみやこのみえれもひやらるゝこのおとのしりくめなひの  
なよしのかしらひらきらいかにそとそいひあへる

これまで元朝の式の事たらぬかすくをいへりさてけふの都のけしきをさまく

思ひやりていかゝわらんなどいひあへる也抄にこへのかどの小家の門なるへしまり  
くめなりどの日本紀に左繩端出とも端出之繩とも書り神前にかくる注連の事也とい  
へりさて其注連繩に鱈魚の頭終など付たる也なよしといにしへ口女郎といひ近俗ば  
らどよふ物也今の注連鋸りにいもたら鰻を用ふ田舎に鯛などにはましてもつけ又  
筑紫わたりに石首魚といふ魚をさながら懸るともいへりかゝる式の世をへてう  
つりゆく中になは其習俗ありて一般ならず京に當時鱈のかしらを物せしならん江  
州大湊のあたりにも今もすなとち鱈の頭を付る家ありといへり此魚の成長するに従  
ひて其階級の名かすくによひわくるより名吉とてなへて今の俗にも出世の魚とい  
へりされりそのかみ歳首に祝ひ用ひたるなるへし終り四時不變にして嚴寒に雪をけ  
すの陽木なれり初春にもせん事尤よしあり中頃より終に鱈の頭をさし加へてや  
いくさしど名つけ除夜に鬼の入くるを防くとして門戸をはしめざるへき口々にさしま  
りす事ありやいくさし申<sup>ヤツシ</sup>刺の畧也後に是を節分に用ふ今のさるかたならて終  
も鱈も一つに注連繩にかさり付たるをいふなよしの頭ひらきらとつらねくたせる

語勢見るへし諸注當初の鱒のかしらを終にそへて今の鱒のかしらの類ひに門にさ  
 したらんと思へるの謬れりさらのいつれ舊年の式なるを新らしく元日の物にいひ並  
 へんも似けなくかつ常に見たてなき小家どもの門にけふしもいかめしう飾りつけた  
 るまめ繩のささらひたるさまのおかしけならんをこそ思ひ出ていかにともいひまら  
 ふへけれかの串鍊刺<sup>イサナ</sup>のりのものならん然いふへくも思はえぬこゝちす況やま  
 くめなこのなよしとの文字あらんに注連に付たるなよしなる事論なき也又今の鱒  
 の如く終にそへんならん二品也といへとも併せて一物也終等といふへきにあらす等  
 の數ある物をすへいふてにをにて次に長谷部のゆきまさらとある等にひとしくな  
 よし終二物をうけたるに論なし其外に飾りそへたらん數品をも大やうにねしめて  
 思ひやらるゝなど自然の事也又終おくのへたるならん終のなよしの頭といての語  
 をなさゝる也混すへきにあらすさて式に頭のみを用ふる事多き専ら其處臆を恐れ  
 かつ魚類の頭を見て其品をわかつての也猶鳥類を翹もてわくるか如し又賤家を打ま  
 かせて小家といへり源氏の夕顔に小家かちむつかしきわたり枕草紙に小家などい

ふ物ゝ多かりける所を今造らせ給へれいなどの類ひ舉るにたへすなほ其後もさる賤  
 しきわたりをいおしめて小家とのみいひなれたり拾芥抄の古圖を案するに右京の  
 坊間の區中數ならぬ處をいみな小泉とあるしたるさまの小家住といふ事をこへす  
 みこいすみなどいひなれたるを其まゝ目えるしに小泉と借字にて書るもの也といへ  
 りさらのそのかみより賤家をいひて猶こへと省きてもいひけんさまなぬゆ  
 めり小泉とかけるのすみつみの仮字たかへれと目えるしはかりにのさのかりを何か  
 のいとんすとのつのもとより通音にて次をすきともかよしいへる例あれなまひてと  
 かひへきに非す又案するに此拾芥抄の小泉のやかて小家の文字を誤れるにやとも思  
 ひ侍りいつれにもあれ今こへの證とするに妨げなしかにそと云ふいかにそ  
 となんいひあへるといふに同し

二日なほねほみなどにとまれりかうしものさげれこせたり

抄云最前の講師のもとよりまた食物酒などわくりたるへし

三日になしところなりもし風なみのなほ志いしとぞしむこゝろや  
あらんこゝろもとなし

かく連日さのりて船出する日和なきのもし風も波も今まとしと我わかれをまたふ心  
あらんもまられすといふ國政などよくとる人を海之神もをしみてさる奇瑞をあら  
とせるなど世にある格の事なれはさる方めかして例の身をふくかたに書なせり上に  
年ころよく具しつるといひ守からにやあらんなど自負せると同じ意也心もとなし  
いかゝあらん然にのわらしかと猶いふかしみ落ぬかたにいひていよく其事を具  
にするのたこれ也

四日おせふけいえいてたすまなつらなげよき物たてまつれりか  
うやうにものもてくる人に猶し<sup>え</sup>あらてい<sup>か</sup>なげわさせせす  
ものもなしにぎいしきやうなれとまゝこゝろす  
たてまつれりとあかめて書るのかの記者の女になりていへりかくをりし思ひ出て

もとの意に立かへりいふかやかて滑稽也諸本猶しもえわらてとあるに従ふへし今  
えをこと誤てる也猶しものわらてといふ語意あるへきにわらすいさけわさせせ  
す物もなしとあるも語をなす一本せさすものもなしとあるに従ふへし又いさけ  
の決めていさかの寫誤也いさけといふ事いまた聞なれすかつ前後いさかの  
みあるをこれとかりまか異やうに書かふへきあわらすわさせす物のかつけ物也さ  
てまごつらにいさかのむくする物もなれ何くれととりやしさわけどもさ  
る心より其人又負ることすといへる事の大やう思ひとらるゝもの詞のつゝさ  
通らぬいさかの聞えさる也猶しもえわらてといもたしていえわられすといふ事なれ  
の下にいさかの物のかつすとか何とそなくての文意とわりをなす猶しもえわら  
ていさかかわさせすものもなしといふ語あるへきならんや猶此間又脱文などある  
へし善本をもとむへし

五日風なみやまぬいなほになしところにあり人たえすとふらひ

はく  
六日きのふのことし

七日になりぬねなしみなとにありけふいあどうまなとれもい  
とかひなしたくなみのさるきのみとみゆる

式日なれの七日になりぬとさらにいへり抄云公事根源云白馬節會を或の青馬の節  
とも申也其故の馬の陽の獸也青の春の色也これより正月七日に青馬を見れり年  
中の邪氣を除くといふ本文侍る也云と白波とか見えて白馬の思ひやるかひなしと  
也といへり感按するに皇國の古より潔白質素をひねとする故に大やう色も白さを  
用ひらるゝと論なしよりて馬をも白馬を向みて御寮にもめされたるへしさてのち漢さ  
まの禮行のるゝに至りて春を東郊に迎へて青馬七疋を用ふるなどいふ本文ある事に  
や承和の頃よりさる式をいさゝかたどり給ひ郊外にのわらて豐樂院或の紫宸殿な  
どにてをりゝこれをを行のるゝものから猶其馬をいもとよりの白馬を引れしかやゝ

上陽人日の行事となり其式備えりて甲斐武藏等の御牧の馬を牽るゝに及びても猶其  
始めによられたらんにい名の青馬にして實の白馬を用ひらるゝ事なりけんかしされ  
り今も波の白さにおもひよせたり文字にもふるくの本文を守りて青馬節會と書れた  
れと後にいたりて其實に付て白馬節會とも書りさゝいへと文字こそわれ猶わをう  
まと稱へてまろちまの節會といふとすさてそのかみ他邦の禮によらるゝ事多しとい  
へともゝとつ皇國の事實をい堅くうつされざるも更お論なき事古典ふつきて知へし  
萬葉に水鳥の鴨の羽の色の青馬をといひ又齋宮女御の松の葉の色にかりらぬ青馬を  
とよみ玉へるなどの只青さといふにつきたるにてかくよみなすもまた歌の常也况や  
其もと青馬なるにの意も差ふへからす兼盛か降雪に色も變らて牽ものをたの青馬と  
名つけそめけんといへるなどの實につきてよめる事又論なし或説にそののみ青馬  
なりしか後に白馬に更ためられたりといへるとおはつかなしさる事物に見えたる事  
なしたとひ宸初の白馬ならんとも其式そなりりくるまにゝ本説の青馬にこそ更た  
めらるへき事なれ青馬を白馬にかふへさいとれ更になき事也このかみ青馬節會

とかき又あをうまどよめる歌などに感ひたるもの也さる事ならぬ既に辨せり即ち  
齋宮の松の葉の色にかえらぬ青馬とよみ給ひし此記小波の白きのみを見ゆると書  
れしよりの後なるよもこの只あを馬といふ詞によりてまのよみなせるにて實の白馬  
なる事を證らむへし又俊賴の引駒の松のみどりの色なれり千年をすくす庭かどを見  
るとよまれたるといよ／＼後なるをやさて當時の節會ならても打まかせてあをうま  
ともいへりと見えて醫心方に白馬をあをうまと訓せたり

かゝるほとにひとの家のいけと名あるところよりこひはなくてふ  
なよりはしめてかはのもうみのもことものともながひつよになひ  
つゝけてたこせたりわかなきにいれてきしかとはなにつけたり

池といふ所の人の家といふ事をまか面白くいへり人の家の池とつらねて其庭のたり  
の池めくおもむきを見せ池と名ある所よりこひのとつゝけなしてやかて其池よりと  
り得たらんこゝちせさせたるあされのあや也されのそ次に此池といふ所の名也と

再びたしかにとわれりさて池のいかならず鯉鮒ある中に鯉をもとらにいへり其次な  
る鮒よりはしめてといひて例の興せり池といふをうけて川のも海のもといふ荷なひ  
つゝけてとわれり長櫃の敷一合のみにあらず魚類異物わから入たるへし異物の魚類  
ならぬたへ物或は酒など也附注本にのこせたり次にわかなきにいれてきしなど  
はなにつけたりとあり今の脱たる也さらしてわかなきをいえらせたるといふと  
をさまり難くかつ其方の歌さへわれりいよ／＼まかど有へき也此文わつかなる一句  
といへども外の手にいつへきにあらぬを味ふへし次にこの長櫃のもの皆人々あ  
らひまてにくれたれりとのある長櫃の物といへる小長櫃の外なるものある事まらる  
魚類また異物とも長櫃に荷なとせ若菜と雑との籠にいれ花も付てもたせおこせし  
也花のものとより折からの梅花なるへし伊勢物語にも長月をかり梅のつくり枝ふさし  
をつけて奉るなどあり後おも大學會の膳部調進の式に梅の造枝に雉子一帯をつけて  
奉れる事ありて御厨子所預高橋家に今も深秘とせるの當時の雅習を權輿なるへきと  
て次に此みやひをうけて俗性よき人なる事をとわれり

わかなきけふをいさうせたるうたありそのうた

あさちふれのへにしあれい水なきいけにつみつるわかなきけ  
りいとおしかし

白馬もみねの七日のまゐるしもわらぬ此おくり物のわかなきけふをえらせられ  
といへり歌の其籠に付たるへし歌の淺ちふの野といこんの枕のみ名こそさのいへま  
との野へにしあれい水なき池也其水もなき池にてつみしわかなき池といふ畢竟の池と  
いへと野もつみしといふ事をあやよみなせる女歌也若菜の池も野もつめ  
と池といへと水もなしといへるお自然お卑下の意ありいとかしこしの諸本お  
とおかしかしとあるよ従ふへしと籠のわかなき池のさしより歌かけて其みやひたる  
をおかしといへり

このいけといふいとこの名なりよき人のをそこにつきてくたり  
てすみけるなりけり

此一句の上の云をたしく注して書る也

このわかひつものものをみなひとくよわらひまてにくれたれをあ  
きみちてふなこともいさうつよみどうちてうみささへたとろかし  
てなみたてつへし

さてかの長櫃の魚類異もの類をの残りなくみな人よわたへし也舟子ともの中お  
も酔まれて立さわくめり腹鼓のいやしきものゝあるさま也くひみちて樂しむをいふ  
莊子馬蹄篇ホトコソシテチマシニハシラチロチチアツシ云含嘯而無鼓而遊なといへる今おかなへりさて船中のみをらす海  
をさへ驚かしめて涙をも立つへしと例の筆にまかせてすまはしさまていへり

このあひたよことれほかりけふわりこもたせてきたるひもそのな  
なとそやいまれもひいてんこのひとうたよまんとれもふこゝろあ  
りてなりけりとあぐいひくしてなみのたつなることゝうさゝいひ  
てよめるうた

日頃にたかひてけふのさすかに人日の心とへ有へきにあまさへまたへかなる贈物さへありてこれか返しなど何くれ事多かるへき日也かゝる日しも破籠持参せし人ありさる事のまきれに其人の名もわすれたりといふ次に誹謗せんための筆つき也其人の名何ぞそやいひしわすれたり今思ひ出へしといふ五井純頼か頭書に此人まれたる男にて又歌も拙けれ其名をわさとあらとさすしてかくいへるならんといへり此書褒貶に心をおかすといへともさすか又あしき方の名をいあらりさるゝ也此えせ人のるしのすきなるをまれの歌よみかけんとて來たると也其をらめる歌の心まふひをこしらへつくらふために船出もなりかたきまてあるゝ事などとかくいひて結句にさてさてけしからすも波のたつなると愁ふるかはにて歌のとしをいひおこせる也

ゆくのきにたつとらなみのこゑよりもたかくれてあかんわれやまのらんをよめるいとれほこゑなるしりてくるものよりかうたはいかゝあらんこのうたをこれかれあはれがれともひとりもかゝしせ

すきつへき人もましれゝとこれぞのみいたかりものぞのみくひてよふけぬこのうたぬし又まがらすといひてたぢぬ

抄云大摩との浪よりまさらんといへるをたのれたり又破子のまつらひのよきよりの歌のたとれりといふゆくのきにたつとら波といへる船路に禁裏也といへりさてこれかれ面白きやうといへどもたれひとりかへしする者あしといふそのあへまらひはめそやす也すへき人もましりをれともみなこの破子のみをめていたかりその物とかりくひつゝ夜更ぬれの歌ぬし手もちなくて其座を退きし也上にもてくる物より云々と破子のよき事をいへるをうけてこれのみいたかりといふいたかりいたる方より出てたすけてはむる事を大やういへり後にいたく住の江とすれ草といへるをも引あてて見るへしまからすのまからんすにて其田舎人のいへるまゝを奪れたりまからんすのまからんといふをそとあへてとむる語也或説に上に波のたつるといふるへいひこといへるるへの詞もさくなれぬこゝちす波のたつなる事まで此



土佐人の詞うるへいひての記者の語をれとむさと上なるまからすの田舎詞をうつし  
うけてうれへをうるへと興しかけるにても有へきや考ふへしとさへり

あるひとのこのわらいなるひそかにいふまろこのうたのわしせ  
んといふれとるきていとたがしきことなよみてんやいよみつ  
くいをやいへしといふまゝのらすとてたちぬる人をまぢてよまん  
とともめけるぞよふけぬとにややめていよけり

まろのもと驕れる自稱にて大やうたかきいの人いへりそれよりなれて憚からぬ  
友とち或の幼童の語のみにつかへりわらひいまた謙遜なけれやんとなき前にて  
もほこりかに物いふ常の事にて今もおれわしなと憚からすいよめり今まるといひ又  
とちらひひそかにいへるきとみなわらひへのさま也さて返しせんといふ思とすある  
に驚きて興ある事をいふものかなまとよみてんやいと覺束なしもしよまるとくいふ  
へしと也抄よこれ紀氏の童女にやといへるのまかるへし次におんなおきなをし

つへしといへるもし男子ならんにのおんかをの引出へからす女子にかきなを引つへ  
しざるの男にも並ふへしといふになれり也抄云わらひ歌ぬしを等れと寂前立ぬる  
まゝにいたる也といへり夜更ぬとにやとのかけれとまはにやかてとひし詞に  
て座つき面白からぬのすくに歸りしなるへし

そもくいひかよんたるといふおしりてとふ此わらひのすぢ  
えちていすすぢひてとへいへるうた

ゆく人もとまるもそてのなみた川みきそのみこそぬれまをりけれ  
となんよめり

そもくの上文を承て端をあらためいふ語也今もそれにして其歌のまついか  
によみたるといふ意也いふかしかりの見事よみたりやいかとあやふみとふ也わか  
れ行人もとまる人も同じ涙の袖にみちて川なせるかいと汀のみまさりゆくも也  
汀のまざるの水かさのまざるをいふすなとち紀氏の歌に雨ふるとよく松風の聞ゆれ

と池の汀のまさらざりけり又君をしむ涙落そふこの河のみさのまさりて流るへら也  
 などあり詞たらのぬこもすれとみな汀の水のまさるといふ也今其涙川やかて袖  
 なれのぬれまさりけれといふぬるゝかまさるなれのぬれさきの歌に行さきといひか  
 くれてなかとといへるに答へてゆく人もとまるもといへりよめりの諸本よめるとあ  
 るによるへしさて此歌かけ歌の意をうけたるより袖の涙川といふなと更に童のもの  
 にあらずかつ汀のまさるといふのすなをち紀氏の語にて外に聞えらぬこゝちす此後  
 兼盛の山河の汀まされる春風にとよめるの即ち紀氏をまなへる也次にわたつみのち  
 ふりの神に云々祈りくる風間ともふを云々なと童のよめりとわれと其歌さま老成し  
 たるのみな紀氏となるへし又たてのたつるれのまたるる云々漕てゆく舟にてみれの  
 云々まことに名にさく所云々の三首なとの心をへはかりの其童のよみたるを歌と引  
 なはされしものならんかさるゝ此章などいかに俳諧ならんからふまからすとてたち  
 ぬる人を待てよまんとて求めけるといひさすかに恥ていとす強てとへり云々なとい  
 へるさとかり造りこしらへすとも有なんと思ふに其かたはかりのむけになき事に

もわらざるへし次なる照月のなかるゝ見れの云々都にて山端にみし月なれと云々の  
 或人の歌などをよやかて其子なる時文ぬし後撰に貫之として入られたるにも此記の  
 或人のみな紀氏なる事をえるへき也この外も或女なといへるたまゝの其方なるも  
 交らんものから大やう紀氏となるへく見ゆめりされと六帖にの棹させと底ひもまら  
 ぬ云々風による波の磯にの云々忘貝拾ひしもせし云々の歌などいふお及とす上に  
 擧たる祈りくる云々わたつみのちふり云々の童の歌またおはつかなけふの子日か云  
 云の女の歌追風の吹ぬる時の云々の淡路か歌をもとく貫之として出せるにもそ  
 のかみの全部紀氏の自詠をあやとり興せられたるといふ事を大やう誰も心得し  
 のなるを知へし

かぐをいふものおうつくしけれいよやあらんいとたれもをすなりわ  
 らいことにていなよおせんたんなたきなよとつしあしくもあ  
 れいおよもあれたよりあらいやらんとてたかれぬめり

抄云かくいふものかりわらひとしてかやうにひよむ事かとかとるける詞也といへり此子を愛する心からにやおもひの外よくよめりと思ふかとかりの歌をわらひへたぞれ言といえん何の詮なしか翁か翁かの返歌也としてつかをすへしと也やとり其まゝわらひの也といひやらんか猶之え有へきを何かせんといひ落しさらひ只をとな歌也としてたるへきを猶うへにいとんとておんなおきなどまていへるなと中事たかへるに似たるみな例の也おんなの老女をいふさてかくまて思ふのか引かたにて實のよからぬ歌やさひよしわしくもわれ又いかにもわれかくもよめりしものをたよりわらひついでにやるへしといひてかいつけておかれしやうす也と紀氏のまを女のかける也只さひかりの歌をかきりなくほめたてゝまた俄にわしくもわれ云云といへるすへてとりしめなく書やりしものにて十八日の末に三十七字の歌よみし事をまどけなく筆のゆくまゝにそしりなかせしと同し書さま也

八日さへることありてなほれなしところなりこよひ月いふみよそ

いるまれをみてなりひらのきみのやまのいよけていれすもあらな  
んといふ歌なんれほゆるもしうみへよてよまゝしあいなみたちさ  
へていれすもあらなんとよみてましや

けふの風波もなきたるに外のさひり有て猶此漢にありといふさるのとけき海上初  
春上弦の月のかたふきたらんめつらしくもあそれならんにまたき隠れんとするをわ  
かす見て業平朝臣のうたを思ひ出られたる也かの歌の本の句あかなくにまたきも月  
のかくるゝかといふか今宵のけしきにかなへるより山端にけての末句のうちわとぬ  
をもとかしみてかの朝臣ももし其月こよひのとき海邊にて望まれしならひ波たちさ  
へていれすもあらなんとこそよまれめといへりさのみいとすても有へきを出るかま  
ゝに評せらるゝもひたすらまめたつ方にやらしとせる例のまね也

いまこのうたをたれもひてある人のよめりけり

てる月のなみよゝみれをあまのめさつゝよみなどい海よをりけり

とや

月の行へを見れぬ遊にこそいれさらん天上の銀河も流れいつる湊のやとり此世界の  
海にらふさうけるといへりみなとの水門にて海と河との界をいふとやのかやとい  
ふ意にてある人とおほめきたるをうけたる也

九日つとめて紀伊みなとより参り、のとまりをたひんとてこきいて  
けりこれかれたかひにくよのさかひのうちいとして見たくりよくる  
人あまたるながにふちいらのときさねたちいなのすゑひらをせし  
のゆきまさらみたちよりいてたうひし日よりこゝかしこにたひく  
るこのひとくのふかきこゝろさしいこのうみにもれとらさる  
し

これかれ入たかひてかはるくにくる也國のさかひを出ぬうちのまたこなたよある  
人おれの尋ねすての有へからすとて猶見おくる人絶すといふ其あまた有中にも此人

人の御館を出つる日よりこの湊かしの泊り追來て別れかたくと也廿二日發船  
の日藤原のときさね船路なれと馬のときむけすといひ又廿七日はしめて浦戸にとま  
られし夜藤原のときさね橋のすゑひらと人追來たりとありときさねの三たひすゑ  
ひらの二たひゆきまさの茲に一たひ出たれと猶みなまのくどふらひたるへし五日  
六日の間人たえずとふらひにくとも有さてこれらみな土佐人也廿三日に正しき錢  
したる八木のやすのりか鯨ひの重き者おのわらて常に召つかのれし國人のつらにて  
とに親しみ深かりしあるへし妙壽本にの言實季衡行政なと眞字おて書れとみなうけ  
かたし此外眞字を加へられたるを見あつめて考るに恐らくの後のおしあておさふし  
て據あるにのわらしとおほゆよりて今とらす御館より出たうひしとわかめいへるの  
記者の女のかけるさま也ささおすむたちより守のたちよりなと書るの自記のふり也  
これよりいまいこきをなれてゆくまれをみたくらんとてその人  
ともいたひきけるおきてこきゆくまよく海のほとりにとまれる

人もとほくなりぬふぬの人もみえずなりぬきしにもいふことある  
へし舟よも思ふことあれとかひなしがれとこのうたをひとりこ  
とよしてやみぬ

ねもひやるころろいうみをわたれともふみしなけれはきらすやあ  
ららん

此漕となれ行今の限りを見おくらんためふこのみたりの人の追付来たと也上に  
奈半の泊をおこんとて漕出けりとあるのまつ大やうを引すへて書たるものにてま  
の只今こきわかるゝ也此つとめての船出にあへるの夜をこめてそ追きけんまへの浦  
戸の泊も夜中よとふらへるさま也さて漕行まに海つらに立とまりて見おくる人  
も遠くなりぬさこそ此船の中の人も見えすなりぬへしさを岸にもさのめていひたさ  
事有へし船にも思ふ事あれともいひやらん方なけれの其かひなしといふ見えすなり  
ぬへしといふへさをさりぬといへりこのいかにかさたりとも船を岸との事まかふへ

さすちなけれのむわりのうへふかゝのらす口調おまかせてたうかふけしきを専ら  
よせる也船の人も見えす成ぬとかなたにありていふにて遠さかり行舟のさま見ゆる  
もの也古今集に世のうき時の涙にそかるなとあるも涙にそかるへきといふを只かる  
といへる此類少からず況や今の次あるいふ事有へしのへしにたゝみてきかせたれ  
實のさるへしの意をらん事いと論なしのくも調をいたとりてことわりをかへり見ぬ  
いいにしへの常也さてかひなしとの思へと猶あらねぬ此歌をひとり言にいひてさ  
てたにやみぬと也前よも守のたちよりよひにふみもてきたりなとある如くふみたに  
あれのいかにへたてし人の心もまらるゝものなれと今もか思ひやる心の使いたゝ海  
路をわたが行をかりおて其書なけれのかはかり悲しき思ひもさきにいえまららん  
といふ也

おくうた乃まじいらぬきすくそのまじのあすらんそいん  
ちとせたりとさるすもことになみうちよせえたことにつるそ

とひがふれもしるしとみるにたへすしてふなひとのよめるうた

その松原の松のかす幾のくあらんを去らすかつ其陰ものふりていく千年かへたらん  
まられすといふをむけに打とふける筆つかひ只ならんや勝景にあたりて經にけん世  
をきつかしむの風人の情也まか神さひたる松か根とに浪のさやかに打よせたる其う  
へにむれるる鶴の飛かひて枝うつりせるなと愛世の外のことちすらん其真景鏡にう  
つるか如きを見るへし船人の打まかせての桂工をいふ事論なしされとこゝの紀氏み  
つからをいひて此歌の所を見るにえまさらすなと例のいひ落せり後にも舟のをさし  
ける翁とかけり舟長も舟士の稱也又記者の方にありての船君ともいひてかく書まど  
のすか此記のこゝろ也

見わたせたまつのうれことよすむつるいちよのとちとそれもふ  
らなるもやこのうたいとこゝろをみるにえまさらす

打わたしたる松のうれも立馴てもすむつるのやかて其松をちよへたる友とのみたの

み思へるさま也といふうれの末にて梢といふにかとらすとちの語のものとちつらな  
る意より出て今としと轉して男とし女とし或の兄弟としいとことしきといふとし也  
同しはこの物の對<sup>か</sup>へる稱にてやかて親しむ方になれりへらのもと可の語なからへさ  
へくなといふに<sup>か</sup>異りてその様子を舍める詞也今をも思ふさまなるを解して粗かき  
ふへし俗にさうさやうなといふに近しえまさらすの抄に絶景歌にも形容しかたきな  
るへしといへり

かくあるをみつゝこきゆゝまよゝやまらうみもみなくれよふけ  
てよしひんがしも見えすまててげのことかちとりのことゝろにまか  
せつどのことならいぬいとともこゝろほそしよして女はふなそこ  
よかしらぞつきあてゝねどのみそなく

さるけしきの見えすなりゆくりさらよて大やう山も海もひとつにこめて暮わたりい  
とんや夕月も入とてゝ東西わきかたき深夜の海上にたゝてげのこ楳取の心にまかせ

たる船中の心はそさならぬ人のいかにあらん實に女の打かつきて音もたてつへしよるの渡海の今宵としめなれのことさらなりけんてけの天氣にて晴雨風波のうへをさせり

かくたもへいふなこかちとりいふなうたうたひてなにともたもへらすそのうたふうたはえるの野にてそねをいなくわかすよきよてきるくつんたるなをたやまほるらんさうとめやくふらんがへらやよむのうなぬもかなせよことをんらことをしてたきのりわをどしてせよももてこすれのれたよこす

かくくるしく思ふにこれを常とせる舟子楫取の何ともおもひてある一夜風にうそふさうたふらん中々おそれにも又をかしても聞ゆかしさて其歌の田舎人の節言のまゝならんかうへにまらへのまにいたく言をとよきていひつらねたるものなれのかてまかとの聞えらるへき推わてに其意とへをいひ試んにまつ此春の野にてそ音を

のなくの發句の其野に出て歎きをるさま也ねおなくのたゞ聲をたて泣事のみにあらずそのかみの打くとき歎くをも皆おしこめて音なくといふゆり外に辨ありやかてなけきの語も長息ナガイキなれと息つくをのみいふにのあらぬか如しさて其人の歎くをきけの若薄おてかくも手をきるくからうして摘來たる菜を負カウにまおきでもて歸りし其うなるか親やうまさ菜なりとたうへらん其親の姑やくふらんねたき物からそのまれ其よへのうなる來たれかしかのあたひの錢乞とらん今やかてと偽りてそしらぬかはにけふもてこす其錢なくの來てもとわらんをかのれたにこすと也かへらやの今の船歌にやんれなといへるか如き其ふしの拍子なるへし後の舟歌のそてにもいへりまはるのまはるはるにて好みくふ事にて嗜の字の意などにあたりて粥をまゐる菓物まゐりてなどのまゐにてたうへる方のまゐなるをまうはるともまはるともいひし也まゐはるのまはると約束されるの參出イキダシをまてといふに同じさるのわかめたる語なれと此句親といふよりいひかろしたれとまはるらんと謡とん又にけなきにあらす親やまゐらんの意也大和物語わかき時に親の死けれのをとなんおやの如くわかより相そ





也おきなりもとより老夫の稱たうめの老女をいふすなとちおききり紀氏たうめの淡路のたうめ也後にかの船酔の淡路の島のおほい子とかけるも今をうけてかの舟酔といへり翁をおきき人としもいへるの他よりいやしめすいふ詞也枕草紙に其かたのなるおきき人たちも打すてつゝなどあり此二人中にもわきて舟こゝちあしくして物をもたへすして其まゝ寐られたりといふあしみての樂しみして苦しみて或のうとみしてあといふにかたねと今俗にいとねの耳遠さのみものもものしたとての物もたへ給えて也ひそまるのぬる事にて今まつまるといふに同じ其まつまるのあかひる語なれ今の御まつまりとのみいひなれたりいつれ寐る事をさしつけにいふを憚られる意也潜まるの其かたちにつきていひ静まるの其けとひによりていへり今俗に物もめしあからておしつまりぬといふにてまか己か事をみつからあかめいへるか例のをかしき也

十日けふこのなをのとまりにとまりぬ

昨日の舟酔をいこひてとまられるなるへしけふのいへる語勢まか聞ゆ

十一日あがつきよふねをいたしてむろつをたふ人みなまたねたれ  
 いうみのありやうもみえすたゞ月をみてそよしひんがしをいまり  
 けるがゝるあひたよみな夜あけて手あらひれいの事ともてひる  
 になりぬ

船中の人みないねたるほどにて苦なともいまたあけわたさねの海の有さまも見えず  
 落月のひまをよりさしいるを見てそわつかに東西をのまると也かゝるほどに月も  
 入てて後やうく残りなく明ゆく夜のさまけしき見ゆめり曉に船を云ふのまつ何  
 のおきて當日舟の進退をむねとすれの最初に書出るか此記の例也さきの廿七日廿八  
 日また九日後の廿四日の所なと引合せてあるへし今も西東をのまりけるといふまで  
 のいまた漕出ぬさき也十一日の月曉まであるへきならねの也かゝる間にといふより  
 を漕出ての後とすへしまつ手洗ひてさて髪わけ湯あみして佛神を禮し或の食事をあ  
 すなとみ奇例の事といふへしかくするうち晝になりぬといふ短日のさま也大よそ毎

朝の所作なれの例の事といへりさてかゝる事とも筆のたよりにまかせ事のついでに  
随ひおくれすゝみてところくくに書出るか日記の常也

いましをねといふところなきぬわがきわらひこのところのなまぢか  
きてえねといふところをとりのをねのやうよやあるといふまたを  
さなきわらひのことなれ人々わらふときよありける女わらえな  
んこのうたをよめる

いましに今の助字そへるまれの今とのみいふに意のかえらすもとら當世にいひ  
なれし言とみゆいましにやかての意にかよへり後に乃の字ををいましとも訓せ  
たりさてまをしをそふるの輕き語をまつむる格にて古今に今しにと能にしものをな  
どある同意也今俗なる女文などに今日し夕しなど書り稚きわらひこの所の名を聞て  
此之ねといふ所の鳥の羽根の形のやうにあるやとふをまたいとけなき事なれんけ  
にもまか思ふへかめりと有わふ人笑ふ也時に同じくそこに有けるめのわらひ此子の

言につきてこの歌をよめりといふ

まことよて名にきくところをねならいとふかことくにみやこも  
かなどとこもなんまいかてとくみやこもかなとれもふこころ  
あれいこのうたよしとよいあらねとげよと思ひてひとくわすれ  
す

今之ねと名にきく此所このわらひのいへるまことにて實に鳥の羽ならひそれを得  
て空とふ如く此船之やく都へいたれがしといふ男女の差別なくいかてとく都へと願  
ふ心きき人なけれの此歌とりまめもきき歌をれとさる時にとまりて母にさこそわれ  
と思ふより結句打すしつゝ人々えわすれすと也さて接するにいかてとく都へもかき  
と思ふ心われの云々とあるもかきの三字決めて衍文にて本といかてとく都へと思ふ  
こころわれのとそ有つらんとく都へもかなといふ其意通せぬ事にて有まじき語也  
都へ入か遅からんを早くと願ふ意ならひ都へとくもかきとかはやくもかなどか下上

に打のへさての語をなすすよし世にある語にもせよと都へもかなといひてのもかなの詞都へといふにおもくかゝりてとくといふまてにの立及のねえたゝ都へもかなとはかりの意に聞ゆ都へもかちといふとかりのとも都への入へからさる人の願ふ詞にて今にの更にかなのさる也歌の都へもかなの翅を得て飛か如くに都へ入よしもかなと願へるにてもかちの専ら飛か如くにかゝりて虚空を飛行してと世にあらぬわさを願へるおれのかなへる事論きし一つに思ふへからすもかなの三字ある時の口調もとのとさるを聞知へし歌の末の都へといふかひとしおれゆとまされ入たる也このえねといふところとあわらそのついでよそまたむかしのひとをたもひいてゝつれのとまよあするへけふをましてゝのむなしがらゝゝといふたりしときゆひとのかすたらねいふうたよかすいたらしてそむゝゝゝなるといふとまおもひいてゝ人のよめ

此所を鳥の羽のやうなる所かどとひけるわらりのいとけなきかおかしういみしきにつけてもむかしの兒の同しほどに物いひ愛きやうつきたるを思ひ出てもまたとるゝかなこのいかなる時にかわするゝ更にわするへきひまなしさるたにあるを今日のましてその母親のかきしみ戀らるゝ事のわけのいとせ下りし時の人の數のうちこたひ一人たらされぬふるき歌に北へゆく鴈を鳴なるつれてこし數のたらてそ歸るへらちると田舎へ下りて男におくれて女ひとり京へ歸る道にてよめる事あるを似たる別れに思ひ出てある人此まかゝの歌をけふしも打おとせてよみけるか故にかく悲しまるゝ也といへりさる意とへをやかて歌へいひつゝねたれの其すち聞とる難きに似たりこの歌ぬしやかて紀氏ならんにの打まかせたる歎きを母のみに托せられし也よのなかにたもひやれともことふるれもひにまざるれもひなきあなといひつゝなん

諸本二句おもひわれともとあるに従ふへし愛世の中にのさまゝの思ひありとゝ

とも子を失ひてこひこかるゝ親の思ひに似るへき思ひ奇しといへり思ひわれとも思ひなきかなとをりあへるかわさどならずいみじき也まかいひつゝなきかなしむといふ

十二日あめふらす文時維茂がふねのたぐれたりしならしつよりむろつにつきぬ

雨ふらすの終日降へさけしきにてさなからくれしをいふさるから船出せさうしといふ意こもれりかつ此十二日より廿一日まで此室津にとまりをりてさのかりくるしまれし大われの催しあれのかくもふらぬさきよりいみしく書出られたりさのいへ雨ふるるといふへく雨ふらすとの打まかせたる文にわらすこれとかりも賊れのうちなるを見知へし文時の紀氏の息時文也打かへして書れし例のにてすへてのあされのいふもさる也末にわのかうへを土佐に住ける女とて書たかへられし中に世にまるとき我子の名をしも其まゝ打出んのかそかりぬへし枕草紙に清少納言かもとへ行成卿

より贈られしあされ文に行成の名をなりゆきと打かへして書れし事など思ひわえずへし維茂のたれならんまられす源是茂の文字をかへたるにもわらし此人随従すへきいとれもあきにや時文の弟などにや考ふへしさてならし津にておくれし船の室津に落わひて紀氏の泊と一所になりぬる也紀氏も曇天にとよせて此舟をまたれしなるへしこの屬船の類ひならて紀氏の妻妾幼童の一族をこの兩人守護して乗られたる船なるへしすへて國人の名をいどく記されたれと都方の人の名を書れたるのなしさるのさらても大やうまるけれの例の打かすめたる也淡路のたうめの此限りにわらする事後に辨せりさるにこゝに文時維茂か船どうち出られたるの彼副船のうへをわかきいとんの外たやすき書かたなき故なるへし又此名のみ例にたかひて眞字にてまるとされたるの漫りに打かへして實のまどの名ならねの仮字にてふんどきなと書れんに時文をかすめたるまわさ也とも誰かの思ひよるへきされのわつかに文字の上にてたにさとらまめんか爲也維茂の名も同じかるへけれとまるとよしなし

十三日のあめつきにふらぬ雨ふるまゝありてやみぬととこ

そんなこれかれゆあみなとせんとてあたりのよろしきところよれりてゆくうみをみやれい

くもよみなあみとをみゆるあまもがないつれかうみととふてさるへくとなんうたよめさ

このみ例にたかひて十三日のとの一言をしも入たるの前日をうくるの文にて昨朝よりの雨やうく今日の晴かたにすこし降出しと也さてそれも降とけすして又やみぬといふこゝにて昨日の雨ふらすの一句をりわへりさらてのかたみに文をなさす心をつくへしいさゝかにといへる爾文字後世いひなれざるをもて疑ふへからす次にも雨いさゝかにふりて前にもいさゝかに物にかきつくさといへり其外ひねもすに浪風たゝすなともありてみな爾文字なくても同じ事也常にもわつかをわつかにはるかをばるかになといへる爾に同じく事をまつむるのにをい也さて明日十四日の齋日なれの妻子のさらにて男女さるへさかさり湯あみせんとして暮るを待て船よりおりた

ちゆく也磯陰のたよりよき所に芦などをりふせて小屋めくものさしかけたるへしいはりさしいは結ふなといふ當時のさま也さて歩み行はと海上をかへり見てよをれし歌也中空にたよふ雲もみな白波の色とそみけるこゝにをるらん海人もかないつれの方が海原ならんとひてまらんすをそ夕まくれのおはつかなきけしきをいへりさふての一本とひてとある正しかるへし又となん歌よめるの一句外にたかひていとつまりて手つゝに聞ゆるの聞なれざるか故也いにしへの詠吟する事を歌よみと体言にいへるより歌よみして歌よみせんなど常にいへれの今もまか書るにてとなんよめるといふに同じき也

さてとさかあまりなれい月たもしろしふねにのりえしめし日よりふねにいくれなぬこくよきぎぬきすそれかうみのかみにたちてといひてなにのあしおけにとつけてほやのつまのいすしすしあひひとそこゝるにもあらぬえきにあげてみせける

既にみちなんとする月のとく海上にあらわれりまさりゆくものからおほろたちて  
 雨氣アメつきたる空あるへしさるの中よにのどやきていさゝか春めける日の夕つかた實  
 におかしかるへしさて船に乗り日より色めきたるのもとよりにてすへてよきかたの  
 衣をのきす其故のかの龍神の見いれてたゞりなさんかおそろしさになどいひつゝそ  
 この昔陰によりてもおせると也女どもの衣ぬきつゝ其衣のうへの心にまかせぬを語  
 りあふさまをいふたまゝ陸をおゆみて衣裳なごめにつくへき事也なにのわしかけ  
 といつくとさゝすそこらあたりの蘆陰にと打こめていふ意とへにて伊勢物語に此女  
 おもひわひてさどへゆくされ何のよき事と思ひていさかよひけれの皆人さゝて笑  
 ひけりとある何に同じ格也俗語になんてもよき事なりなふかそこらならんさといへ  
 るに似て何くれをとのすおのれ呑込ノコをる意とへ也物語のもなんてもよき事と思ひて  
 といふ意今もあつても昔陰にとつけてといふ意にてすなとち上にいへるあたりのよ  
 ろしき所をさす委しくいへとちにかそこらの昔陰おといふにてわさとおしあてにお  
 はめくも次あるいみしきあされをはのめき出んの料也事つけての事よせてよてそれ

によりてといふ也はやのつまの云々の其女どもの陰所のあらはるゝを形容せり保夜  
 の色も形もそのまゝ女陰のこときものにてはやのはのすなとち陰上のは也すへては  
 のふゝめる物の稱と知へしやかてこれを西國にて海玉門といふ他國にて貽貝イカヒを東  
 海婦人といふにあへり況や鮪となしたるの打みたれて今一きとかよひぬへし主計式  
 に貽貝イカヒ保夜交鮪ホヤノツノまた貽貝イカヒ富那交鮪フナノツノと見えたり鮪も似たりといふへしこれも齋宮式主  
 計式等に鮪スシとあるにて鮪となせる鮪也まか鮪になす鮪の決めて其形小にして耳か  
 ちならんにいよく女陰おはゆへき也其鮪さともてはやさるゝ世にの常に似たる  
 物とまつらん今もあされに赤川といひ松茸などいへりやかて女陰男根に思ひとらる  
 ゝ如きの類ひなりかしおそろく此二物正月の式に用ふるものならんにの時にあへ  
 るあされにて尤をかきさ也いま數千釣鮪カネノツノなどいそんか如しいすしの飯鮪の意にて只  
 すしとのみいそんに同じ今も備中備後のあたりにての常にまかいへり鮪のわつめ  
 すしの意なるへしあつめをつめといふの常につめをつまといふの鮪とつらなる音  
 便也爪ツメ琴コト彈指ツツの類の如しさるの數品ましへ物するならんにはやのつとのいすしとわ

るたゞ保夜とかりにての交の義をなさず飯と交る事とも見かたしよりて接するに此  
つまといふのもたら此所に緊用の語なれハ常交船といひなれたる名稱にまかせてそ  
の心までをいひさぐる也さらハ又たつますしとあるへきをつまの云ふものもしを  
くハへてとさらにいへるハかの妻のゆかりをたしかに聞せんと也さてつまのすしを  
すすしといへるハ口調にまかせたる也飯に心あるにハあらし只此文ハはやのつまど  
いふ一句ハ滑稽のかけめなるを聞えるハ近世の小説中に膳部の吸物をすいの物に  
て候と答へし事ありすいの物のすいの俗に心さいたるを粹といふすい也吸物をすい  
の物といふいこれなけれとさる方に聞せんとの戯れ也今も交船をつまのとさりて  
妻の浴を思せたる心へ准ふるにたれりまとの妻の保夜といふへきなれとさるハ  
今俗に女房の赤貝といとんにひとしく打つけに陰所の事と聞えていとまのゆけれハ  
幸ひにつますしの名をかりて下上にいひくたしてあらハならず打かすめたるかみや  
ひにおかしきなるへしもとより實の船をいふにあらて只其名をかけるのみきれハ  
さハかのとわり差もんをハかへり見すいとんや此章いみしき滑稽あらん

にハ聽人心して只句ひくるかをりとれと打ハなれて書なかしたるもの也とさにか  
くハもすそ或ハ袴など腰までかへけ上るをいふ也それをうつして何によらすあらハ  
に物を見するとをされとみてハはきにあくといひけん今の鄙言に隠す事をいひあら  
ハすを尻をまくるなどいふに似たりさて當時兼輔卿七月六日にたなとたの心をいつ  
しかとまたく心をとさにあけて天の河原をけふやわたらんとよまれたるか古今に見  
ゆると此日記の外にハかゝる所につかへるをいまた見すまかもこれらみな俳諧なれ  
ハ一時の俚言なる事あるしこれを今ハ女の腰あらハなるにいひよせたりさるハ見せ  
んとしてみするならねハ心にもあらずといふもとより夜陰にしてさる物陰の湯のみ  
外より見ゆへきならねと女とちハ打こみて隔てあへぬさまを思ひとかりて彼女の方  
になりていふ也よにあまりしきわさをかくもみやひにまらへあくらんハかはるけ  
のわさならず見たよあやまつとなかれ

十四日あつしきよりあめふれえれなしところにとまれりふなきみ  
せちみすちうしものおけれいうまときよりのちにおちとりきのふ

つりたりしたひにせにあげれいよねどとりかけてれちられぬか  
とよなほありぬ

をとつ日よりもよはしてきのふいさゝか降し雨この曉をまことに降出て數日あれたる  
也抄云ふなきみの其船中の主君にや紀氏をいふへしせちみ妙壽本に節忌と書たまへ  
り精進の事也さうしものすなわち精進の食物也十四日齋日也とに正月五月九月の  
年三とで持戒精進して一切の罪を消滅すへきよし佛書に侍り云々又云よねをどりの  
けての米にてとりかへ買たる也おちられぬの船君の船中不自由にてさうしものなき  
ゆゑに朝精進をかりにて落られし也といへり鯛の昨日のさきにとくまりてあられし  
なれの楫取ら幸ひのいとまを得て釣たる也今日のあるゝのみならず齋日なれの殺生  
をの禁せらるへしさて便利にまかせて米にかへられたるを錢あけれのといひなしか  
やうの事猶ありとまていひあらしせるなど皆すへて俳諧也これを精進を還られさり  
し事たひくありといへるに見るへからすさてよねにかへてあといふへきをよねを

どりかけてといへるも決めて當時の戯言をらめと今まられす

おちとりまたたひもてきたりよねさけなとくもおちとりけしきあ  
しきらす

又もてきたるも昨日つりかける鯛なるへしくるのくるゝにてくたしあたる也抄云  
けしきあしからすの機嫌よき也

十五日けふあつきおゆにすくちとく

抄云拾芥云世風記云正月十五日亥時煮小豆粥一為天狗一祭庭中案上一則其粥凝時  
向東方一再拜長跪服之終年無疫氣といへりさてけふあつきかゆにすとある此書  
さま例の也けふ小豆かゆ煮るといふ書へし其煮るといふへき語勢をくしきて煮すとい  
へるか俳諧也けふあつきかゆにすといふ文のあるへからざるを聞まるへしもし煮さ  
る事を實に書んとならのかささま猶あるへく又煮さらんとならこのみ書すても  
有ぬへし正月の式すへて何事もせさらんに小豆粥をしも取わきて煮すと書出たるか



をさなめきたるに重ねてくちをしとさへいへるか愚かにをかしき也前に十二日雨ふ  
らすとあるに同じまらへのあされ也くちをしくのく文字の決めて衍字也古仮字のし  
文字のなたりたるをしくとよみ誤てるなるへしまたあつきかゆにすといふより俳諧  
なる事を聞えらす是のかりにくちをしといふへきいとれなしと見て後にくをくへ  
て次の文につらねたるにやされともくちをしと猶日のあしけれとといふと有へうも  
あらねのいよく通せぬ文となれり

猶日のあしけれいあさるほどにそけふはつああまりいぬるいたつ  
らに日をふれいひとくうみをなめつそあるめだわらいのい  
つる  
たていたつおれいまたあるふくおせとあみといたもふとちにやあ  
るらんいふかひなきものいふにいらとにつまひし

立出しより日のみあしけれいあさるやうにてすこしつづ漕ぐるあひたに今日のとや

廿日余り経たりと來たる舟路のわつかにして日數のみ重なるを歎く也かくいたつら  
に日をふれいた海上をのみ皆打なかめつくらしをるといふなかめい思ひわりて  
打まもるさま也まかつらく見をりてある童女のためりしといふよき中らひいたつ  
にもあるにも離れぬものなるを浪の縁より思ひよせて風波の相ともなるの思ひわひ  
たるとちにやといふさるの風波の日をふれと共にたちるのやまさる方よりいへりさ  
てこの風たての波もたち風ぬれ波もあるといふ意されと風のも形なけれいやむ  
といへとあるといこれするをかくもよめるの波のゐるといふかたにもたれた  
る也次にも雨風ふかすまた風波たかけれのさといひ前にも日ひと日夜ひと夜といひ  
て明にけりとのみうけたる皆かたへにつきていへりさて意詞をさなくて淺らなれど  
もとよりわらへのよめるなれのそれ相應也とたすくるかたにいへりいふかひなき  
の數なると言にもかいらぬをいふ

十六日風なみやまねいな念になしところにとまれりたうみだな  
みなくあつていつしかみさきといふ所わたらんとのみたもふ風なみ

とにやむくもあらず

みさきといふ此室津よりさきの泊までのおひたにて廿一日此津出船の日に過られし所なるへし余り久しく同じとまりの風波にくるしめの一泊にても漕出んの心ようたい波ををさめそこれに早くわたらんとのみこひねかふ也さるに中々急に止へくもあらずと云いつしかいつかといふとかりはやくといろく意也只いつかといふにいたかへり次にもわらぬもおきなもいつしかと思へんにやあらんとありとにハ頼たのにあるへしこの蘭らんをらに鏡せをせにといふ格也されと頼たのの當時とみとのみつかひおせりさるの文ぶんをふみ蟬せみをせみといふに同じ妙壽本にもとある方にやとも思への上のいつしかわたらんといふにハ頼たのにやむへくもあらずとあるを語調ともかなへるにや風波ともといそんいつかぬるさこちす

ある人のこれなみたつをみてよめるうた

霜たにもたがぬかたそといふなれとなみのなかにハ雪をふりける

さてふねにぬりし日よりけふまでにはつがあまりいつかになりにはり

更に霜もかかぬ南方暖國の海濱也といふなれとたつ波の其中にハさしも雪こそふれとかねて聞おけるを疑ふかたにいへり方ぞといふに瀉をそへたり抄云文集に誰云南國無霜雪一盡在愁人髮髮間云々此本説を用ふ白波を雪に見なして雪を降けるとよめる下句也といへりふねに乗し日より云々の十二月廿一日より正月十六日まで廿五日也

十七日くもれる雲なくなりてあがつきつくよいともたもしるけれハふねをいたしてときゆくこのあひたに雲のうへもうみのそこもたなしとくになんありけるうへもむむしのものこいせいいうまうなみのうへのつきをふねいたそふうみのうちのそらとといひひけんきよきれにきけるなり

こよひめつらしく夜半の後晴わたりていまた満たる曉月の面白さにうかれかつ日頃  
 待倦し船出されの明るをまたて漕出し也此わいたの例の發語にてあらためて今宵の  
 賞景を云也雲の上の海の底に對していへるにて只大空をいふかの水やそら空や水と  
 もいひ撃ニ空明一今折ニ流光一など歌ひし夜のさま也をこの賈島とす附注云詩人玉  
 屑十五云高麗使過ニ海有一詩云水鳥浮遊没山雲斷復連賈島詳爲ニ楫人一聯ニ下句一云棹穿  
 波底月船厭水中天麗使嘉歎久之自レ此不ニ復言一詩といへりさて按するにすまのち此  
 詩をうたひのけし也いづも詩とたにいへて歌ふなるを今夜しもなとうたひさるへき  
 歌さへ數ありて去れたる夜のさまなれの中ニにうたふといひさる也さて波底を波上  
 とし水中を海中とせる皆字訓のこゝにかあひすして論ひかたきより然どりかへて調  
 をなせるもの也かく波のうへの月海のうちのそらと歌ひてこそ今夜のまらへにか  
 ちひ却て詩情もうかふへけれ兩句の末なる上の月中ウチの空の字の聲の波の海ののれ  
 内にひゝきて波のへの月海のちの空とやうにきたらくもの也波のそこの月水のなか  
 のそらと其まゝとあへてよからんやと一のをぬを聞分へし又船のボネすとのへて

そふといへるか自然襲の意に轉せざるかめてたき也屠蘇をどうとさへいたひい  
 へりましてや今の歌ふなるをやこの皆入聲を平聲にかへて即ち平調に臨これたるな  
 るへしえか平調にまらへなせるの水上にて論ふか爲にしそれ又女の臨ふによし有ん  
 事などあまり幽微の論に落めれ説のこせりさて次なる二首の歌に至りては又もと  
 の波底月水中天の意にかへりてよめり心を付へし按するに後の句の船のそふ海の  
 うちのそらとある終りのを文字のちて海のうちの空といひけんとあるらんか  
 意も調もといひてかつの紀氏の文法にもかなへりとおほゆれとさる本もなけれの  
 いかゝのせん附注本にの即ちを文字なけれと上の波の上の月をのを文字もともにな  
 けれの猶よりかたし疑らく下のを文字のなきによりて上のを文字も後に省きたる  
 にやあらんさて此詩の聞されにきけるなれの決めて差ふ事有へしといふ聞されの今  
 俗に聞かすり聞えつりといふにてまかど正しく聞さる也されの言のやかておされの  
 されにて正實あらぬをいへりされの去いにて物のさりとなれたる意より出てされ頭カウ  
 乳石など皮肉をとなれ土沙をとなれたる稱也風にさらし水にさらしなといふも合あ

夫の意にして物の本性をぬくをいふにて同語也さるのされ言はれ業も常をとなれさ  
りたる意なるを知へし前にもから歌のこれにえかすどある同じ意とへにてから歌  
など女のえよみうましさものなれた人の傳へを聞かほえてたしかならぬよしに  
いひて今夜とりあへすうたひかへたるふし／＼を聞たかへのあやまらに書なし給へ  
る凡器の及ふ所にあらずかつ其光をかすめて千歳の末にたどらしむ又いみしどもた  
ふとからすや昔のをこのかむち打て馬のすゝまされといひけんためしおほゆかし  
うへの俗になるはどけにもといふにて此を見て彼をさとり今によりて昔をえるやう  
の所にいへり今も昔買島かうたひし夜の眞景にあひて然いひけんけにもどめて興  
せる也

またあるひとのよめる

みなそこ月の上へよりこくふねのさどにさいるいかつらなるし

歌ひあけたる詩にあたりて又ある人といへり是にても詩を朗詠せし事あるへした  
た古詩のうのさしたるをのみうけて又どのいふへきならず前にもから歌聲あけてい  
ひけりやまと歌あるしもまろうともと人もいひわへりと有歌の意水その月の上を  
かくも漕わたる舟の棹の末にかいと見ゆる其影さめめて月中の桂なるへしと光の  
うちにさしかへそさまを打みやりていへる也月の上よりのよりの漕わたるあひたを  
さしいふ言にて萬葉に雲間從狹徑月乃云フモイノミヤノノセノチノツキノ從蘆邊滿來鹽乃云アサヒノ人都末乃馬從行爾已ヒトツマノウマノヨリニ  
夫之歩從行者云ウチノカチヨリニなといへる從の意に同じき也後世こゝよりかしこよりあといふよ  
りとの堅横の差ひありていにしへのつかひさまの廣かりし也大和物語にかたゐのや  
うなる姿なるこの車のまへよりいさけりうつは物語にいといかめしうて此としかけ  
の家のまへより詣て給ふとあるよりなど全く今と同じ月のかつらの和名抄に兼名苑  
月中有河々上有桂高五百丈などあり  
これどきとある人またよめる  
かけみれいなみのそこなるひさかたのそらこきわたるわれそわひ

しき

うつろふ影を見れり水底やかて虚空也その中空にうかれても漕わたるか侘しきと也  
 今夜の月明賞すへしといへども又さるかたに物すみて心はろきさま成へし久方のと  
 たける枕に一首のうへ静まりて水中一面の大そら見ゆるこゝちそ初句の影見れり  
 即ち大空の影也月の影とおもふへかすささてこれの船舫水中天の意前の歌の棹穿波  
 底月の意也されと棹のうかつといふに桂をさのらせ船のおすといふを空にあくかる  
 るさまに調へかへたり後世只句のねもてをよみよささてたれりとする類にのわらす  
 おくいふあひたに夜やうやくあけゆくにかちとりらくるきくもに  
 はかにいてきぬかせふきぬへしみふぬかへしてんといひてふぬか  
 へる此あひたあめふりぬいとわひし

月の照なからやうくえらみ行海上に一むら雲の俄に出きたる明方のさま見るこゝ  
 ちすさの今風吹出ぬへし船とくかへしてんといひもわへを漕つけて室津に歸りたる

也はるく漕戻すはと雨ふり出て舟もまといおまふきけん夜のまのはとに引かへた  
 るさまけにも侘しかるへし御舟かへしてんといへと船かへすとうくへさわたりなれ  
 どさるの口調をえさるより船かへるといひてかへしたれのへりしといふふたゝひ  
 のことわりにていひおろせりこの待いたすを待いつる脱せとるを脱とるまといふ格  
 にてたゝみてあらへをさす語言の常也此間雨ふりぬとの其むひたのみふりて歸るや  
 りさやみたる雨のわやにくさをいへりすへての何事もいとて只調のすみやけさう  
 へにてさしもわわてまといけん急雨のさま手にとるとかりのこゝちせるのわやしか  
 らすやおろそかに見る事なかれ

十八日なほたなしところにありうみあらけれはふねいたさすこの  
 とまりとほくみれともちかくみれともいとたもしるしかくれとも  
 くるしけれはなにともたもほえすまことちいこゝるやりにはあ  
 らんがらうたなといふへし

寺は雨のこれたれと風波あられの又とよまれる也さて此泊日數へて朝夕なれくる  
まゝに遠く見わたせとも近くみやれともいかに面白しされと日頃さゝふる風波の  
くるしけれのさのかりあかねけしきにも歌きとよまんともおもほえぬを男としりさ  
すかに詩なと作りてうたひのすめりさるもやむを得ざる心やりにやあらんといへ  
りこの何事もおもほえずの歌よむころもなきといふ心やりの苦しき心を外へや  
るにていまま氣晴しといふに似たり

ふねもいたさていたつらなれいある人れよめる

いそふりのよするいそにいとしつきさといつともわかぬゆきのみそ  
ふるこのうたはつねにせぬ人のとなり

あら波の打よする磯へにいつを冬いつを春なきならに年月をわかぬ雪の降のみや  
まぬと也立波の間なく時なきを此日頃めなれ来ていつもかゝりと年月をさへきりめ  
ていへり船もいたさていたつらされりよめるといへるをわけて聞へしいそふりの磯

觸にて荒波の名也此ころの大おれに岸より高く碎る波の散のまかひを船中より見上  
たふんのまことに雪のこゝちすへし頭書に相摸風土記云鎌倉郡見越崎毎有「速浪」  
崩石國人名号「伊曾布利」謂「振石也云」といへり此いそふりも即ち土人のいふ名  
にて荒浪をいふ證也謂「振石也」とある名義の釋のとられす後の歌にいそふりとよめ  
るおれと皆此記によりてよめる物也さて此歌の平生歌よみなとせぬ人の言也といひ  
ていそふりなと方言のまゝをいたとらす聞なりによめるをまわれり

またひとのよめる

風によぶなみのいそにいさくひすもはるもえとらぬ花のみそさく  
ふく風に波のよる磯へにの露のもとよりにて春もまらざる花の咲わたる也大やう  
花の春の物にして露の來なくの常なるにこり今その春きから春もよそにて露もよそ  
ぬ花そといふ花のみそののみ専ら下のさくといふにかゝりて咲のみさく意也上の  
歌の雪のみそ降もまきりに降ことをいひて雪のかりといふにあらざるを全く同じさ

て二句涙の磯にのどつゝけなしたる事いかゞ風に波のよる磯にのど打かへしてさく  
方よもかきひさる調わり萬葉にも白波乃濱松之枝シラナミノハママツノエとありこれも波より濱とつゝけた  
る不審の事也去とらく疑ひを殘して後勳をまつのみ

こけうたともどすこしよろしときつてふねのさをしけるねきな  
つきころくるしきころるやりによめ。

たつなみゆきうはなかとふくうせそよせつゝひとどとめるゝら  
なる

この上にかゝれとも苦しけれの何事もおもはずといへるを受たり此けしきをの見  
奇からざる歌よむ心もなかりしかと此人のよめるをさしてすこしおもしらくなく  
さむ心つきたる也このよろし心よろしきにて屈したる心も引たてしをいふ此歌と  
もをさしてすこしよろし云々と打かへして意得へし前に人のわらふを聞て心のすこ  
しなきぬとあると同意とへ也此歌とも意をよく聞なしてといふ意にみる事奇か

れ歌のころをよるしと聞てくるしき心やりによめるといふとわりもなき事也船の  
をさの抄に船中のつかさする心也紀氏をいふへしといへる月ころ苦しき心やりの上  
に苦しけれの何事も云々といへる其ころるやり也さるの此歌ともに催されておのれ  
も歌ころになれるをいへりさて上にかゝれともくるしけれといへるの次に男と  
ちの心やりにやあらんとうけたれのかの女のいふと聞ゆるを今の又船のをさしける  
翁のくるしき心やりと書る其くるしむ人前後男女のたかひあるに似たれといつれ紀  
氏みつからいへるなれのさのかりの例のかへり見られさる也月ころの日ころのたか  
へるちらん前にも後にも苦しきとあるの此連日の苦心をいへるなれの日ころとなく  
ての更にかなりす月ころといふへからすこの日の字の月となたれたる也歌の意た  
つ白波を吹しく風の雪かどよせ花かどよせて人を欺さとかるさま也といふ花かど  
いへる二句にてさる歌也上に雪のみそふる花のみそさくと見まどひたる兩首の歌の  
意をうけて雪と見せ花と見せつゝ人をとかるといへりよせつゝといへるの雪によせ  
花によせの意あるべし

このうたともぞ人のなにあといふとあるひときよふけりてよめり  
そのうたよめるもしみそもしあまりなくもしひとみなえあらてわ  
らふやうなりうたぬしいとけしきあしくてえす

人のなにかといふどの何のまかしくかかしくとあけつらふ事にて此歌ともは  
非を評するをいふ今も常に云語也さて其評を又ある人かたへに聞ふけり居ていさお  
のれもとよみ出たる也ふけるの道にふける色にふけるなどのふけるにて物に深入す  
るをいふ也さくもてゆくまゝにわれを忘れておはれぬるやうの意にて歌まらぬ身も  
よみつへう思ひありたるをいふさて其歌をさけつよめる文字のかす三十七字也人み  
なそのをのしさをたへてえあらずして吹も出へさやうすと也是を見て歌ぬしきりか  
り嘲り給ふへさおのあらしと氣色せし也えすの怨す也やかてえんすとも常にいひて  
まふねくうらむるさま也怨のうらみとよましむる字なれと音のまゝにとなふれりた  
たうらむといふどの自然たかへる事也たごへの歎すといひ念すといへりなげくとい

ひかもよといふどの意とへ同じのらさるか如しこゝにてのふつくみて不満のかた  
ち也うのはにある時にくけにえし給ふ源氏に女君も今のとにえし聞え給ひす枕草  
紙に人もさのよかなりとえしてなどあり

まねへともえまねはずかけりともえよみすゑかたがるへしけふた  
にかくいひかたしましてのちにいかならん

其歌のさまいねひみれともまねひえられす又よし筆にかけりとも誰もよみ送ん事か  
たかるへし見さくするけふたにかくいひとさかたし況や後に傳へて聞ん人のいか  
あらん歌とも何ともえわくましきといふ歌のころきとかりの事をかひかり誹謗せる  
もいと可笑きにすへておしつむれり何のとわりもさく手にもかゝらぬいみしき滑稽  
也

十九日日あしければふねいたさす

きのふの如くあるをいふ



二十日きのふのやうなれいふねいたさすみな人うれへおけく  
るしくころもとなけれいたゝ日のへぬるおすぞけふいくおすつ  
かみそびとびそふれえれよひもそこなえれぬしいとおひしいも  
ぬすえつおの月いてよげりやまのえもなくてうみのながよりせい  
てくる

きのふの如く日のあしけれの船出せすと也いつ漕出へきとぞ愁ひなけさて心も落ぬ  
ねいたゝ経ぬる日数のみかそふるといふ舟出せしよりけふにていくのそとをる指の  
其とらひかへす十日めくを二十日三十日と書てとしめの十日を省ける也今夜明け  
の三十日なれの大敷を合せてみそかといへり此泊にすへて十日のかりもあられしか  
のまにらんしられしはと見えて十五日の所にもけふ廿日餘りへぬるいたつらに日を  
ふれの云々十六日にもさて舟にのりし日よりけふまで廿日あまういつかになりに  
けりおとありまか敷回フキマヒかそへかへすに其をる指もそこなへしと也およひのゆひ

也およひのおの省かれてよひといふへきをゆひといとるゝの口調の自然也さるかた  
の物しににいもねられぬうち遅き今宵の廿日の月も出しといふいとわひしいもぬす  
とつかの月出にけりとつゝしりたるまらへにいと屈して倦たるさま見え又かく打  
静めたるまらへに物すこき海上のけしきも見ゆるもの也聞知へしさて其月の常見な  
れたる山のそなごのあらて海の中より出くるといふいもぬすの寐入られすといふ也  
くのしくいへといといふか寐入事にてねといふの臥靡く貌也いといひねといふを體  
用の語也なといふ説のとるにたらず

おやうなるをみてやむおしあゝのながまるるといひけるひとハとる  
こしよわたりておへりきたるときよふぬよのよゝきところにてお  
のくよひとうまのはなむけしわおれおしみておしこのおらうたう  
くりなとしげ

安倍の仲麻呂の事ハ世にいらざるくかつ諸注に委しけれのこれを答すさて唐土より

歸らんとせられたれども其船風に吹戻されてつひに彼地にて終られし人也さるに  
 今歸り來たる時にとあるのかなのぬこちすさのかりの心もやらて書なかされしに  
 や加藤磯足か校異にのかへりくる時にと有へき所也諸本傳寫の誤ならんといへり船  
 にのるへき所の古今の詞書にいとゆる明州也さてそこにて王維包信等餞して詩など  
 作れりといふ或人云此文かやうなるを見てやと打出たる語の末を受たる所なしと不  
 審せりこの青海原の哥の末のとそよめりけるといふにて落着する也されどなかに  
 またこれを見て仲麻呂のぬし云々を全く同じ事をさへ再ひいへれいよく聞ま  
 とふへし同じを重ぬるの古文の常あるにかつかく其文なるき時はしめの心をわ  
 するくに似たるを又重ねいひて扶け起すにてたとへり某云とはしめにいひて結ひに  
 いへりと再ひいふに同じ意をへ也よし其本末のとわりたしるくに似たりともた  
 其理耳お入やすく其感心にとはりやすきか文辭の本たる事をまると疑ふへくも  
 あらぬ事也

あかすやありけんはつかのよの月いつるまでとありけるその月い

うみよりそいてける。

なこり盡すや有けん別れかねて廿日の月の出るころまで酒くみ詩など作りかひせる  
 と也さて其月のかくの如く海より出しといふ是あてみれと世お仲まろの彼地發船の  
 とつかの日也といひ傳へたりけんされの廿日の月も海上より出るも故郷を思ふもみ  
 な今夜のさまに同じけれと更にそのかみを思ひ出られたる也

これぞみてそなかまろのぬしわかくにいかにうたをなんがみよ  
 よりがみもよんたひいまはがみなかまろのひとまがやうにわかれ  
 をしみよろこひもありかなしみもあるときにいよむとてよめりけ  
 るうた あどうないらふりさげみれいあすかなるみかこのやまにい  
 てし月のもとそよめりける。

さてこれを見て仲まろのぬしいとく吾國にの此歌といふものありてその天地ひらけ  
 そめし神の御代より其神たちもよみ給ひそれより傳へひろこりて今の貴賤となくお

しきへてかくの如く別れおのそみ或の歡ひあり或之悲しみある時に必しもよむ事  
也とてよみ出し其歌といふ海上とるかに打見やれ月こそいさし出たれ是ぞ年頃戀  
またひし彼ふるさとなる奈良の春日の三笠山より出たる月かど也扱まとの發句天の  
原なるを今青海原にとりかへて時にあひせて興せられたる也諸本これを見て仲丸云  
とそ文字なきに従ふへしさて此歌本書に余の歌のなみに別行おかけれと今の未  
なる業平朝臣の歌にならひて文中に書つらね侍る也さるの全くおのか私ならず此記  
の奥書にいとく其書様和歌非<sub>三</sub>列行一定行書<sub>二</sub>之聊有<sub>三</sub>關字<sub>一</sub>歌下無<sub>三</sub>關字<sub>二</sub>而書<sub>三</sub>後詞<sub>一</sub>  
云とあるを見れり彼紀氏の自筆の本といふに歌もおしこめて文中に書つらねい  
さか關字ありしのみなるを定家卿謄寫の時今の別行に書かへ給ひし也されりも  
とより此歌も去か書つらねたるを何の心なくこれをも別行に書給ひしやら朝臣の  
歌并に賈島か詩などの中將の云く昔のをのこい云くと其詞歌に詩につらなりたれり  
自然に關なく今のよめりける歌とあれり自然に關ありしを自余の歌とひとしくふと  
扱舉て書給ひしもの也又かく改めたるの恐らくは後のさかしらかも知へららず凡文

中に關字もて歌をわかつ時の古歌自歌の差別なく關字すへきも妨げを即ち此記の原  
書それなるへし又別行にゑるす時の古歌を關字にして別行ならず自歌とわかつへ  
き事論なし此抄本即ちちのりさて前なる春の野おての舟歌も其うたふ歌とあれり  
これと同じく誤て端を擧られしもの也されり彼も是も今の紀氏の原書に従ひていさ  
さか關字せるのみ又後なるわらりの舟歌おのか思ひをのへたるものにてこれに異  
也混すへきあらず

かのくにひときよきよきよしうれもほえたれともこのころを  
とももしにさまもさきいたしてこのことをつたへたる人よひひ  
とらせければこのころをさきよえたりけんいとれれひのほかになん  
めてける

さて唐人の聞えるへきならぬいかてかどの思ひたれとまつ此歌の意詞を漢文に書  
出て日本語つたへおほえたる人にどくとはいひまらせけりそれか言に付てたれ

〳もよく其意をきとりけん思ひの外みな感歎しけると也事のこゝろを男もしにかき同じく其さまをも書出してといふをつゝめてかけり事のこゝろとあるのすなり歌のこゝろ也さまを書出しとあるのよみしいこれにて其ゆゑよしを書る也次なる廿七日の所に都遠しなといへる事のこととあるさまも其いこれにて明帝の事のこととさせりさて漢文ならんに誰にてもよみ得へまをこゝらにこゝの詞つたへたる人ふいひまらせとあるの其歌のてにをのやうのうへを委しくまめしたりといふこゝろ也さつさて接するに此歌を明州にてもよまれしといふ事と漢とも其證據なき事也續日本後紀の詔詞の中に唯有<sub>三</sub>換天之章<sub>一</sub>長傳<sub>三</sub>擲地之響<sub>一</sub>とあるなどをとり認てわつかに此歌をさせりなど思ひまどふへからすさて此歌正しくの古今集にもろこしにて月を見てよめる天の原云とありされと左注にかゝれたるの此日記と大やう同じおもひき也この別れに臨て仲麻呂の詩ありし事を聞傳へとりとやせしより彼歌をも同時によまれたりと附會して唐人を驚かしめし様に擧げてし一時の訛言なるへしまつ歌のさまたゝかなたに在てこなたを慕ひ侘てよまれたる調いちまゝく更に留別の跡

に非す今ありふ青海原とかへられたるうへの意をへのもとよりまひて解へからすかよそ四十年の間かの國につかへし人の歸らんとする今のまで吾國の歌物かたりせずて有へきならんや又さつかり彼地おなしみし人の今更譯吏をたのむへけんやみなこなたにありて思ひなせるまわさなる事まゝをや紀氏いたゝ世にいひ傳へしまゝを書れし也此事くのしくと別に論せり

もろこしとこのくにといふこととをこゝなる物なれと月のかげはたなしことなるへければ人の心もたなしこととにやあらん

抄にこの一段の文意一入奇妙にやといへり實にまかりすへて此廿日一章の余の滑稽のなみにあらず大やう正文にしてきは深き心ありまゝる人味ふへし

さていまそのかみとれもひやりてある人のよめる歌

みやこにて山のはに見し月なれとなみよりいてゝなみにこそいれ  
都にありていつも東の山端をいてゝ西の山のとに入とのみ見なれし月の今宵の海

原の波よりいて、又その海原の波にこそいれと引たかへたる船中のさまをいへりす  
なうち仲麻呂ぬしも海上の月を望みて都の春日なる三笠山を懸しまれたる同じ意を  
へなれのそのかみを思ひやりてといふ此歌を後撰に海より出て海にこそいれとして  
入られたるの非也山に對しての海とあらんかどわり叶ふへく思はれたるからめと波  
より出て波にこそいれといへるにこそ其けしき有てかつ浮たる旅情もうかふ物なれ  
まして海より出て海に入といへるの其語調かもくして山の上に見しなと手かろさ  
らへに應せざるのみならず東西に海のあらんこゝちもせられてかたゝかなとさる  
を開えるへしすへて紀氏の歌を梨壺の五臣後撰に直して入られたるあ一首もあたれ  
りと見えたるのなし況やこれにならひて捨遺已下の撰者妄りに筆削せられたるの  
の蛇におちさる類ひにていよゝ傍ら痛さわさ也其さかしらの誤のこゝく紀氏の  
家集に辨せり

廿一日うのときはかりにふなすみなひとくのふねいつこれを  
みればはるのうみにあきのこのたしもちれるやうにそありけるに

ほろけのぬかひによりてにやあらんがせもふかすよき日いてきて  
こきゆ

このはのくくと明わたる海にらに屬船のおくれ進みて己かちりく漕出るさまをい  
へる中に今日めつらしきこれを見て此律のはどりにかゝりし船とも一時にうかめる  
海上のけしきをおしこめて聞せたり春の海なるよときならぬ秋の木葉の散れるやう  
なりといとも興したる語調に今朝の舟山のうれしきけこひ自然にうかふもの也ねは  
るけの云くおほどのみの本語の大やう大多麗の三つの意にわたれと是をこかつ時  
おほさくおほさなるねはさやかなといふときの大の意となり只おほしおほさといへ  
の多の意となり又ねはろおほしくしなといへる麗の意となれり其出たる本の意の同  
しきものからてにをのこたらさにてくさくにちりゆく事もとより語の常也さる  
中にたましくおほろけとおほろに氣の言をそへいふ時の麗の意のみにとまらすま  
た大の意にも通へる事を見ゆめり古今の底ひなき淵やのさわく山川の淺き漸にこそ

あた波とたてどある歌を六帖にいはほろけの淵やのさわくとありこれも大の意にて  
限りなく深きをいひて底ひなきといふにかゝるへからす物語などとも廣大の意をか  
ほろけのまかしくといへる事まゝありさるゝ此おほろけの願ひもかゝる輕からぬか  
たにて俗に容易ならぬといふ也やかて重きのおもゝおほの音便也されゝおほろけの  
願ひの輕からぬ願ひにて大願念願などの意とさくへし彼かすかある方にのみいひあ  
れたると混すへからすさて此日頃佛神を祈て深く願ひし故にやあらんつひふ風もな  
きてかくよき日より出きてうれしくも潜ゆく事と也

このあひたにつがはれんとてつきてくるわらひありそれかうたふ  
ふなうた

なほこそくにかたひみやらるれちよはありとしれもゝいぢゝ  
らやとうたふそあはれなる

さて土佐の國より紀氏おめしつかのれんとてこたひの歸路につき從ひて來たる童子

ありと也此童のれそらくの女のわらのふやあらん前にも童女を只わらのと書れしと  
まに見ゆめりさるゝの彼亡見の伽トなどにて同しつらにうつくしまれしをわすれかたみ  
又其母奇との引具してのはられしおやさてそれか歌へる舟歌に我のなほ國の方こそ  
のかへり見やらるれ己か父とゝかなたよわれのといふ人ゝのかゝる日和待つてや  
かて都へ歸らんといさみよろこへる今日しも獨引たかへて故郷に遠さかるを悲しむ  
か哀ある也此舟歌なほこそ國のかたを見やらるれ吾父母の有とし思へゝと縁に  
三字のてにををくゝのふれのとむなき短歌なるをさるかたにうたひなせるのみ此童  
子もとより海邊なれうたひおほえたるにや又此日ころ聞まゝに口なれたるにやい  
つれにまれいよしへの我思ふ事をいさるかたのふしにまかせてとりあへすうたふり  
り今もたまゝするわさ也又かへらやといふの船歌の拍子なる事前にも見えていち  
まるくかつきはこそ國のかたの見やらるれ云ゝの春の野にてそ音をいなくと同調な  
るを聞えるへし

おんうたふとさきよつゝこさくゝにんろとらふとらふはのう

にあつまりざりそのいはのもとになみまろくうちよすうちとりの  
いふやうくろきとりのもとにまろきなみまよすとそいふ此こと  
えなにといなげれともものいふやうにときこえたる人のほとにあ  
いねいとるむるなり

抄にくろとり和名に鶺鴒黒色水鳥也云々といへり或人云今も西國の海邊に若などの中  
に居る水鳥にて鶺鴒の形して大さの鳴のかりなる色と眞黒なる鳥をくろとりとよふ  
此ものかといへり鳥の黒さと波の白さとさのこにとえあるを見めて、まか〜とい  
ふその詞風流めきたりさりとて何といふとかりならねとかれら如きの人からに似  
合しからす面白けれの聞とかむと也諸注此なにとのなけれとも云とあるを何心な  
くいひたれともこなたより作意ありけに聞なせりと見たるのたかへりくろきとりの  
もとにまろきなみをよするといへる心もなくいひ捨る語ならんやかまへていひし事  
論なし又何心もなくいひし言ならんを人のほとにあとすとほむへきにあらすくろき

とりを一本くろとりのもとにと有によらりくろとりやかて鳥の名ならんにのそれと  
かりの心なくいへりともたすくへけれと波とも白波ともいそて白き波をといへるの  
なほ黒きにむかへたるをいへりせん次のみふねよりおふせたふまり云々の所の所  
に此詞の歌のやうなるの楫取のおのつからの詞なりとあると一つに思ふへからす  
かくいひつゝゆぐよふなきみなる人なみをみてくよよりをしめて  
かいらくむくいせんといふなることをたれもふうへにうみのまたた  
えろしけれいかしらもみなまらけぬなくそちやそちいうみにある  
ものなりけり  
わかかみのゆきといそへのまらなみといつれまされりたきつとま  
なりおちとりく

この船君波をみての波を見ていとるにのといふ意也さていまた土佐の國を船出せ  
ぬとしめよしかねて海賊等國守の命にてまなく追捕せられしをいきとほり此たひ

の歸路を待て其報いせんといふなる事を傳へさして愁ひ思ふかうへに又日ころ風波  
 のおそろしさにさへあひて頭もみな白髪となり果ぬと也此ころ南海の前伊豫椽藤原  
 純友東國の賊首平將門に與力しおはけなくも帝都をさし狹みてかたみに資のはら  
 とす徒黨の群盜千數艘をひきゐて海上を横行し或の郡邑を抄掠して狼藉甚しくは  
 んど大やけにもして余されし時也まかも土佐の敵國に接したれの尤最初より防禦の  
 要害にたて籠りまゝく戦ひ物せられてたやすく犯す事あたのさりしならんにさ  
 る方の遺恨さめめてなくの有へからず報いすへきの時を待えたるへし今も土人の口  
 碑に云純友か叛逆紀氏の任末にあたり尤不意にいてさめめて無勢なりしかども此  
 浦戸の水門をたちさり死力をつくして防ぎ給ひしによりて賊船一度も乗こむ事を得  
 さりしと其智勇を語り傳へて却て歌仙なるものまらざるもの多しと云りたふとくも  
 愉快ならずやされの紀氏退去の後すなち同國八多郡のつひに賊火に焼亡せりやか  
 て備前介于高播磨介惟幹など救兵なくして此賊の爲に身を殞せるのくちをしくもは  
 かなからずや紀氏の畏まるゝもうへなりけらし海のおそろしけれのといつておわれ

と中に就て此室津に日ころへて今日までありし苦しさをさしていへりの日數の  
 ひた十五日の所に徒に日をふれの人の海をなかつゝそあるといへるより十六日に  
 も只海に波なくしていつしかみささといふ所わたらん云々十八日にも若しけれの何  
 事もねはえず云々月ころくるしき心やりによめる云々昨日廿日の所にもみな人々思  
 へなけく只日の經ぬる數を云々など佗歎かれたりされの今日の舟出をもおほろけの  
 願ひによりてにやあらんとまで歡へるに其くるしかりしほどはかるへしされの上の  
 波を見てといふの専ら海のおそろしけれのといふにかゝれる也其並ひにかねての海  
 賊のおそりをも加へいへりされと風波のさそりをこゝにての苦しといとておそろし  
 といへるの海賊のつらにいへれの也さて世人愁ひにあへの白髪となるものなれのか  
 しらまらけぬといひていたく若しく恐しきを見せ又魏の韋仲將か凌雲の額を書しお  
 そりに忽ち白髪となれりし例など思おしめたりさて齡の爲にかねてもなれる白髪を  
 今此海路の恐しさに一時にまらけたるさまに書なしたれの我へたるいくはくの齡の  
 只此海中にこそ有つれといふ今年紀氏の齡七十三四歳なれのなゝそちやそちといと



れたりさて歌の意わか髪に積れる雪と磯邊による波といつれかまろき沖津島守まぢ  
 り劣りをさかんどいふなるの残る筋なく黒髪のもちけ果たるさまをいひつよめて下  
 に磯たる述懐也島守の波など常に見なれて委しからんの意よりいふ萬葉に八百日往  
 濱之沙毛吾戀二豈不益歟奥島守をさもあるも同じ意をへにて具砂の數をもよみおはゆ  
 へさものにいへりさて島守といひひかけたれと其島守の沖にありてこゝからねの楫  
 取まかいへといひ傳へさせたる例の筆意也妙壽本沖の島守とかちどりのいへりと有て  
 楫取のよめりとするのとりれす接するにこのいへりのりの衍字にて沖の島守とかち  
 どりのいへと有しなるへしまかど文字あるときこの傳へやる意いよく明らけし

廿二日よんこのとまりよりこととまりびたひゆくするのよやまみ  
 ゆとし九つをかりなるこのわらえとしよりをささなくとあるこの  
 わらふねとこくまゝに山もゆくとみゆるを見てもやしきことう  
 たとよめる其うた

こきてゆくふねよてみれいあしひぎのちまもくゆくまづいさ  
 すやとそいふまなまきわらいのとよていふつゆと

泊の名をさるされなるのいひつきていひかさねて見るにうるさけれいとて有へき  
 の心して省かれし也さて男のわらいの年よりわたなき生質なるかはるかに見ゆる山  
 の端の舟につれてゆくやうに見ゆるをみて怪しき事かな歌をそよみ出たると也かく  
 漕わたる船にて見れの山さへもともにくめりかの峯にたてる松の山のゆくともま  
 らすやあらんといふこゝろなき松のさま實にまか見ゆるを船中に在なからゆくど  
 もおはえぬ人のうへよりかけていへりこの歌わきて其意をへをさなければわらいの  
 言にての似つかのしといふ揚の帆覺三岸行あるの舟行岸移などいふと同じ意と思ふ  
 へからすかれと船をやるに従ひて岸のあさまお退くと行といひ移るといふにて今  
 どの遠近の望みひとしからねの進むと退くの違ひある也

けふうみあらげよていそにゆきふりなみのえなきけりあるひとの

よめる

なみとのみひとへにきけといるみれいゆきとをなとにまかひける  
かな

海わらけにてのわらけてといふに去の言のくわたりたる也さるのわらけきりわらけ  
てたるにていたくあるをいふ次にも爪のいとなくかりにたるといひ末おも大  
かたのみなわれにたれとなどある去の字に同じ倭物語に思ひわつらひにて侍るなど  
さへいへりゆきふりの行觸にて波のわりそにゆきふれて碎るか花に似たりといふさ  
きに磯ふりと有しに同じ意也萬葉古今等お道行ふりちどある行ふりにて行ふるゆき  
ふれなどそのかみ常まいへり萬葉に吾背見我自細衣往觸者云く草枕客行人毛往觸者  
云く近くの俊頼の歌にさらし井のこの下陰にゆきふれの衣手寒し蟬のあけとも仲實  
大原やおほろの水にゆきふれと夏のをちなるものにそ有けるなどあり歌に雪と花と  
にとわるにつきてこれを雪降と意得たるのひかとも也波の雪ふりといふ意ならんに

雪ふりより上に波のことさくつての語をさぬ事也波の色の雪に似たる事とやかて上  
にあくまていへれのわさをはふけりさて歌の意ひとへに波とのみきつれと打つけ  
に見れり雪と花との二しへにまかひけり云く舉竟音さけり波にて色をみれり雪花  
の如しといふ意をわやにらへり

廿三日日てりてくまりぬこのわたりあつそこのれをりありとら  
いのみほとげむいのる

晝より曇りしなるへし初春の空のさま也

廿四日きのふのれなしところなり

おなしきのふの所也といふをまらへにまかせてかくりん

廿五日あちとりらのきたあせあしとらういふぬいたさすあしそく  
れひくといふとたえすきこゆ

海賊追うつといふ事水陸の驛つたひに間なく告ぐる也されと北ふく風に海上あしと

いへとも漕出すといふ一本かちどりらきたかせ云と有に從ふへの文字ありて  
の語をなす

廿六日まことにやあらんがいそくれふといひの夜半をかりふねをい  
たしてこきくるみちよたむけするところありかちとりとてぬきた  
いまつらするよぬきのひんがしちれいおちどりのまうしてたい  
まづるといこれぬきのちるかたにみふねすみやかよこおしめたま  
へとまうして奉るまきよてあるわらひのよめ

わたつみのちふり乃かみよたむけするぬきのれひがせやますふか  
なんをとよめ

いよく海賊追來へきよしいとせめて實説に聞ゆれ今の順風も待わへす夜ふかく  
船出して漕わたりくる海上の道に往かふ舟の所向する所ありといふなるは此海邊に  
さるへき神社おとすを遙拜するにや又の萬葉に對馬乃渡渡中爾幣取向而云し海若之

何神乎齋祈者加なといへるによれり海上のさるへき所にてりやかて其わたつみを  
祭る事にやいつれにても有つへしさて楫取してものするに其ぬさもりわへす松風  
の東さまに吹やれとさて猶打ちらしつゝ申奉る言のまかくと也北風ならんにの眞  
向ひの南をれどかゝる時のかのつから神のささとひわりけなる方に思ひなし見す  
かうへに彼さきぬさまかも正しく散へきならねの大よそ東南に亂れんをまこらくひ  
んかしさまとして其ちる方の都の空へ速かにやらしめ給へといふ也諸本夜半はかり  
より船をいたしてとあるに從ふへし此ぬさ奉るさまより歌かけて思ふも夜明てのわ  
さ也さらの夜なかはかりよりとよりの言くのりて語勢ゆるますしての事のうへに  
かなふへからす夜半のかり船を出して云々の語勢急にして漕出るやかてに手向すと  
やうに聞ゆる也歌の意今このわたつみのちふりの神又手向まわらす幣の吹さそひる  
る其追手の風やます吹つゝきて速く都へつかしめんと願ふ也ちふりの道觸の意に  
ていつくにまれ其道に行ふれたる神なるへしと諸抄にいへり貫之集にゆくけふも歸  
らん時も玉銚のちふりの神を祈れとと思ふとあると此歌のみにてかく紀氏によまれ

し外に當時さる神の名見わたり侍らぬの實のいかにとも定めかたしわらひのよめる  
と書るの例の也童の歌の賦裁ならんや

このほとにふせよけれハあちとりいたくほこりてふねにほかけな  
とよろこぶそのれとをきよてわらハもたきなもいつしがとれもハ  
ハよやあらんいたくよろこぶ此中よあハちのたうめといふひとの  
よめるうた

たひかせのふきぬるときハゆくふねもほてうちてこそうれしがり  
けれとそていけのとにつけていのる

かくするうちに北風ふききほりて今をまとの追手になりぬれハ此幣のちるかたにま  
かくといひし楫取等ののり得かはにいたくほこりて帆かけきとすほこるを俗に鼻  
高しきといふ也其音をきよてわらへもおきなも都へいつかいつかと思ひをれハにや  
けしからすよろこぶと也さる中にも淡路のたうめといふ人よろこひの余りによめる

歌かく追風になりぬる時ハ人のみならず行舟さへ手うちてうれしかると云はてハ帆  
の手にて帆綱をいふ追手おきそひて帆腹をたたく綱の音のそろき聞ゆるをまかい  
へる俳諧歌也今も帆のなる聲をはてうつといふよし西の國人いへり上に帆かけきと  
よろこぶ其音をきよてといへるハこれか爲也今俗ハ人をいやしめていふ時手をまじ  
てはてといふ事ありさるハ細手の器にて細首細腰ホソウビホソコなどいふ類にや當時もまかいへる  
を帆の手にかけしにやあらんさて此うれしかりのかりハ濁て唱ふハしききにいたか  
りいふかしかり次にくやしかるなどあるかりと同意なれハ也荒き風波のとみにきさ  
たるを悦ぶ余りをかく心なき船までにおはせていへりといふ意をていけの事につけ  
ていへるといふよや猶考ふへしいつれいのるとあるハ通すハからぬこちすまつ諸  
本いへるとあるハ従ふへきか

廿七日おせふきなみあらけれハ舟いたさすこれおれがしまくなげ

く

また北風にさえかへりたるるへしかしこくのいみしくなといふ意にて甚しくつよ  
き方になれり俗にきつうきといふ也かしこみおそるゝとかりの事ハ輕からぬわざな  
れの自然さるかたに用ひおれたり伊勢物語にいとかしこく思ひかゝりしてと心なかり  
けり又いとかしこくおかしかり給ひてなれといへりこれらふかく思ひかゝりしいたく  
おかしかる也倭物語にもいとかしこくめて給ふてかつけものたまふいとかしこく歡  
ひわへりきとあり

ととこたちのからうたに日どのそめいみやことほしなといふなる  
ことのおもひなきゝてある女のおよめるうた

日どたよもあま雲ちかみよものどみやこゝと思ふみちのをさけ  
お

女よりをとこたちとさすさて詩ハ船中誰その作なるへし其句中に望日長安遠とあ  
る事のこゝろをいかにと問さけりこの晋書の明帝記の文に明帝數歲元帝抱置膝前

屬長安使來因問汝謂日與長安孰遠對曰長安近不聞人從日邊來上居然可知也  
元帝異之明日宴群僚又問之對曰日近元帝失色曰何乃異問者之言對曰舉目則  
見日不見長安由是益奇之とあり此意をとりて作れる也と聞てそれによりてよ  
める歌といふととかり遙に照す日も見ゆれいと近きものをいつかと思ひやる都  
への道のりの遠き事よと也舉目則見日不見長安の意をよみてよめり天雲の遠  
きといふ枕にさへつかひてすなとち次にも天雲のくるかなりつるかつる河とよめる  
を却てこゝに天雲ちかくといへるに大空ひとつなる海上にさし昇りたらん日影の  
さま見ゆめり

またあまひとのよめ

ふくおせのたぬおきりしたちくれいなみちいとゝさるけり  
けり日ひとひおせやますつまをしきしてぬぬ

ふく風のふきまやまぬかきつたつ波も立やまぬ其波ゆく道のさとり果ていよく

たるけしと也つまのしきの物をにくみ疎んする時にせしわさ也源氏の帚木にむくつ  
けき事とつまはしきをして空蟬につまとしきをしてうちみ給ふ枕草紙につまとしき  
をしてありくもいとをかしけれのなといへり按するに密家の所作お彈指して物を撥  
遣する事ありさるか世おうつりてもとら物を思さくやうの事には常にまかせし事と  
見えたりそのかみ浮屠氏より出て世におこなたる事少しとせす

廿八日よもすのらあめもやますけさも

終日たゆまぬ風に夜もすから雨も降くのりてけさもなほやますと也

廿九日ふねいたしてゆくうら／＼とてりてこきゆくつめのなむくりた

なるをみて日さかそふれいけふい子の日なれいりたきらすむつきなれい  
ハ京の子のひの事いひいて／＼まづもい／＼とうみなかなれい  
かたしがい

きのふの風雨なきてよき日よりとなりし也てりて漕ゆくことならぬ語をささぬ

お似たれとすへてそのかみかゝる所にて文字の今のころとかたりて此てよて語さ  
るゝ事也こゝらにてのうら／＼とてりてきて漕ゆくといふとかりになりてたゝらに  
引つられあるに非す前の廿一日よき日いてきて漕ゆくことあるも同じきみ也上にむ  
かしの人を思ひいていつれの時にかわするゝ云々又海の神にわちてといひて何の  
あしかけに云々後にもいふに随ひていかゝのせんとして眼もこそふたつわれ云々など  
いへるこれらの思ひ出ておちてといひていかゝのせんとしてなどのて文字も今のこゝ  
ろにての落るぬ也倭物語に男物などもとめてもて来てまにてふせりけれいと淺ま  
しと思ひけり空穂に笛ともいとなやかお心ありて畫の文を二まき三まき見源氏  
にみつの友にて今一くさやうたてあらんとてわれにさかせよ父みこのさやうのかた  
にいとよしつきて物し給ふけれの枕草紙にまけまの色ゆるされにけり山の井大  
納言のわらひ給ひてみなのりつゝきてたてるに今ぞ御こし出させ給ふとある此求  
めてもて来てといひとなやかに心有てといひうたてあらんとてといひわらひ給ひて  
といへるて文字も亦同意おて此外も擧るに堪す古今序にもうねめの戯れよりよみて

此二歌の云ふなどかゝれたる格にて猶古語に多し委しくこのに辨せず諸本つめいとあかくなりたるをみてとあるに従ふへし今なかくなるを見てとあるのかないす又子の日なりけれのとあるに従ふへし今子の日なれのとあるの上のかそふれり下のむつきなれりの前後のれりに語勢つきあひて調とものさる也さてその爪きらん爲十二支の日なみをかそへ見れり子の日にあたれり抄云拾芥抄に丑の日の手の爪買の日の足の爪さるよし見えたり丑の日を待にやといへりけふしもめつらしく春めきてうらゝかなるに心ものとやきて爪の延たるか目につき其爪きらんとするより子日のさたに及へりむつきなれりまたむつきの内なれりといふ意とへ也初子中の子もわりしを心つかてとつゝお末の子を事にふれて思ひ出られたる旅中のさま也さて都のさこそと思ひやるにつけて松たあれかしといへり船中なれりそれもうる事難しかしと也磯にの松も有へきなれりわきて海中といふ抄にさきの子日の日の字の滑てよむへしこゝにての潤るへしといへるのさる事也

ある  
とんをかきていたせうた

ねほつかなげふいねのひがあまならはうみまつたよひがましものごとそいへうみよてねのひのうたよていひかあらん

諸本あるをんなどあるに従ふへし今日の子の日なるかおほつかな實ふさらの海底お生るうみ松をたにひかましを海人ならねりそれもえかたしと云日なみさへたとくしきにかつ子日めくけしきもなけれり子日かどわやふむ方にいへり凡子日の遊ひの初子のもどよりにて中の子ねと子二月の子日までも事に随ひ折にふれてする事也うみまつ海松也海松の内膳式にも見えて常にとりはやし海松海松ウミマツなどの稱さへありて誰も見しれる物なれと其文字につきてまかよみなせる俳諧也常にみるをうみまつともいふにのわらすさて子日の野にてするものおれり海にての子日につきなくて歌などにのみみ得かたきを是といへりあらんおしからざるお非すやとよからぬをほむる例の也

またある人のよめるうた

けふなれとわかなきつますめすものゝわかこきわたるうらになけれハ

今日の子日なれともわかなくつむむさもせずさるゝかくこきわたる浦邊に春日野のな  
けれのど也野へのなけれとなどいふへきを春日野とさしあてゝいへるかをさなくて  
めてたしさて今の都にて若菜つまん所をいへる嵯峨野船岡岸川などよて有へきを當  
時何のうへにもいまた平城の舊俗遺りて若菜といへるとまつ春日野と唱へ出ることな  
りかし此外も花といへる芳野泊瀬紅葉といへる三室龍田を稱する類ひかそへかたし  
さるゝたゝ舊稱をいひなれたるのみならず外にいへるこれある事別に論せり又子日に  
松を引のものとよりにて必若菜もつめり今も打まかせてけふなれといへり公事根源  
云七種云々内藏寮ならひに内膳司より正月上の子日これを奉る寛平年中より始れる  
にやとありされと其もとのわかかつむより松を引にもかよへるもの也其引かゝる若  
松の根のゝひゆかんを祝ひよせて子日にものせる事となり若菜も若せぬ名をよみす

るよてみな言葉のさきとひをいへるおのつからなる古のてより也さるゝに荆楚歲時  
記云正月七日俗以七種菜作羹食之入無万病などいへる類ひの事をもよそひ用  
ひられしや若菜つむを七日と定めしもこれらの唐文によりて也また菅家文章云予  
亦嘗聞故老曰上陽子日野遊厭老其事如何其義如何倚松樹以摩腰習風霜之難  
犯也和菜羹而啜口期氣味克調也云々とあるもさるへきとわりならめと 義に  
のみ拘りれるゝかの後のまわさかてあかゝく皇國のすかたは非す

あゝいひつゝこきぬたもしるぎとこるよふねとよせてこゝやい  
つこととひけれいとまのともりとそいひけるむかし土佐といひけ  
るところに住ける女此ふねよましれりけりそがいひけらくむかし  
まゝいしありしところの名たくひよそあなるあはれといひてよめる  
うた

としころとすみしところのなにしたゝいきよるなみどもあはれと



そみる

けしき面白き所に船を漕入ぬと云さていかなる所そとへ土佐の泊といふにつきて打つけに土佐國の事を思ひて外ならずなつかしみたる意とへをかく異さまに書みたせるの其わけよくまれたる事にていかにすとも紛るへきすちならぬうへに最初に或人あかたの云々と書て土佐ともいぬを今さらわらひに打出んの文のさまもかかしからぬの也さて此ころを昔といひやし土佐國を土佐といひける所といひて國くさかせす其國守たりし吾うへを住ける女といひ船中こそりて土佐に在し人なるを此船にまじれりけりと己ひとりのさま書なせるみな思ひとなれし滑稽也名たくひの名のたくひの文字脱たるなるへし名たくひといふ事有へうも思とれず歌の意明らかし

三十日あめがせふがすかいそくひよるありきせさなりときよて夜中んかりにふねをいたしてあいのみとをわたる夜中なれいよしひ

ぬ  
んがしもみえす男をんながらく神ほとけをいのりてみとをまたり

今日の此日頃にかたりて暮て後も雨ふらす風も吹さる也さて彼強盗の夜陰に忍ぶ類ひにあらすなかく書を便利として追來たるよしを聞てさらの此雨風きき夜のはとお阿波の水門を渡らんとて夜半はかりに土佐の泊を漕出し也さはかりなる賊船の襲ひ來る事を夜にまされて物せるみそか盗人の常のさまをふみてよるありさせさりなどいひこなして書るの例の也此筆つかひを悟らすして海賊夜行せすといへるを古來いふかしめるのあそしといふへしやかて紀氏の上洛と入ちかひて紀淑人賊徒追討使をかねて伊豫守にて下られ竟に平治せられたり淑人のすなち紀氏の猶子濟望の弟にしてともに古今集の作者也倭物語お野大貳すみ友かさわきの時うての使にさされて少將にて下りけりと書るも此時にて參議好古なと引つゝきて物せられし也かくも例なき南海のみたれをまか書かるめて世人さなりとも聞えらぬまで打かすめた

るか滑稽のいみしき也頭書にいふ今までの浪風あらしといへども四國の地を傳ひ來たれりこれよりの海をよこさりて和泉國にわたるなれのとりわけて心もとなく神佛を祈る也といへりもとより風波の祈りもさる物から海賊を避るの祈りも専らせられし也今和泉の國に來ぬれ海賊ものならずといへるにても去るへしそもく此たひの渡海のあひたのあたかも戰場の日敷にひとしるの實に片時を争ひて和泉の灘に漕つけんとする也もとより海賊夜行せずといふ事も必とのたのまれすおよご賊船の陣頭の夜討に風雨を願ふにひとしく風波のさわきに乘してものするものなれん尤阿波の鳴門の如き海岸狹隘の切所にてまかも東西まらぬ間夜に取圍まれなれんよく防戦自在ならずして大事あるへけれん也或説にかく海賊をおちてともすれん佛神をいのらるゝ事みゆるのわざとかまへてめしきさまを見えんとなるへしといへるの時勢をまらざるの謬也かしこくもおほやけにすら去年五月此賊徒平攘の爲山陽南海道の諸神に奉幣使をたてらるゝのみならず同十月に追捕海賊使をさへ定められて伊勢加茂八幡をはじめあまねく靈社に封戸を寄られ諸寺諸山の御時はいふも更

也宮中におきても衆僧に命して仁王會太元法なとまのく修行せられてさるかたにいとまなき世也況や今の其凶賊まさにせまりて追討んとするにいたれりいかなる誰かの佛神を祈念せさらん思ふへしからくいのるの丹精をぬくにて身もからさきて念するをいふ

とらうのときいかりよぬままといふところをすきてたながえといふところをわたるかくいそきていつみのなたといふところよいたりぬげふうみよ波よにたるものなしがみほとけのめくみかうふれるよにたり

沼島よりたな川をわたるいそきて和泉の灘につきぬと也さて明わたる海上をみれんけふの一點の波らしきものもなく實おのどけき日也といふされんからく祈りし神佛のめくみを蒙れるに似たりといへり似たりけりいそぬ謙辞也  
けふふねののりし日よりあそふれいみをかあまりこゝぬるになり

にけりいませいつみのくよきぬれをいそくものならす

かの舟にのりし日よりまつ和泉國までと願ひしかやうく三十九日めにからうして  
着たりといふされの追來といふ海賊も今の恐るゝにたらずと落つき悦ぶもおよそ此  
日記にのちもてたてるまめくしきすちの事すへてあるされすやむを得ざるにわ  
たりてのわさと漫りに書あされていよく眞をうしなとしむめりされの世におはや  
けならん海賊のうへなとのかかてのえわらぬ所にのみ物せられたるさまなるに其事  
六ところまで見ゆめるにも正記のおもていか斗ならん思ひやるへし其外さる事わ  
りてなほ同し所也といひ文時維茂か船おくれたりなど見えなほ風波のうへによせて  
て日敷を過し給へる多分かの海賊の進退を伺れたるなるへきにより更に物の具のい  
とまなく太刀の緒とけて寐玉へりし夜もなかりけん古來此日記の全文滑稽あるを見  
えらすかつの古調の聞えりかたきよりつひに其意をよみ得る事なく却ていふかひな  
くをいしからぬさまにさへ思へらんのかしこくもいみしからすや

二月朔日あしたのまあめふりうまときえかりよやみぬれいつみ

のなたといふところよりいてこきゆくうみのうへきのふのこと  
くよ風波みえすころさきのまつをらぞへてゆくところの名はくろ  
く松のいろいあそくいそのなみいゆきのことくよかひのいろいす  
えうよて五色にいまひといろそたらぬ

あしたの雨晝より晴てこきゆくまへに又昨日よかたらぬよき日よりとなりし也午時  
の余の時にたかひての文字なくとも口調つまらぬまかいひなれたるなるへし前に  
もうま時より後に云くといへり所の名の黒さの虚也松の色の青さの實也虚實を對に  
してさて波の雪貝の蘇枋といひて白き赤きをさかせ黄をいかにももどめ出へきを  
一色たらぬといひ捨たる何をかにもなきに似ていみじきもいみじき也抄にも俗筆  
の及ぶ所にあらざるへしといへり五色の音讀にすへき事論なしされの文字にて書り  
いついろといへりむいろなくいろともいへん方にうこきて色の定敷をいふにかなと  
す今の俗にもこきとこそいへりいついろといひて通すへけんや

これあひたにけふいそのうらといふところよりつなてひきてゆ  
くぐくゆくあひたにあるひとのよめるうた

玉くしげえこのうらなみたゝぬ日いうみをかみとたれが見せら  
ん

きのふた奇川といふ川の名きこえ又具の色をいひ綱手引ゆくなとやゝきこみたる海  
つらのけしきに自然都遠からぬなつかしささま見ゆめり歌の意明らかし玉匣の箱の  
浦といふ枕詞なから海を鏡といふまてにかゝれり萬葉卷四にも臣女の匣爾乗有鏡成  
見津乃濱邊爾云々などあり鏡の楳崎に乗れるものなれり也

またふなきみのいそぐこけ月まてなりぬるとゝなびきてくるしき  
にたへすしてひともしふことゝてこゝろやりはらゝる

ひくふねのつなてのなかりきえるの日ぞよそかいらかまてわれいへに  
けりきくひとのれもへるやうなそたゝことなるをひとかにいふ

しふなきみの <sup>は</sup>おちくひぬり出してよしとれもへることぞえしもこ  
そとひととしてつゝめきてやみぬ

按するに二月の陽氣盛に昇るの氣候にして必暴風發るの月奇れの九海上にねそるゝ  
時也されの正月の中にとく入浴すへき心かまへにて年をこめても出船せられしなる  
へしざるを思ひの外にさそりきて今日のをやその二月といふまてになりぬと打歎く  
也果して住の江の危難わりけり余りになかさ船すまひを苦しみ倍てさて人もいへそ  
いふ事として其口つきにもあらぬを心やりによりりといふいつにてもれちめなる歌と  
いへる紀氏己かを打出てゆくまゝのされとみを書れし也初二句のなかさといえんた  
めにやかて時のささを序とせりさるの當時の序のふり也かくも長さ春の日を今のよ  
そかいかといふまてへにけりさるのりたゝよひて有へき事かといふけふの四十日  
めなれりかくいへりよそかいかの四五十日と大よそにいふ也昨日の所にふねに乗し  
日よりかそふれの三十日あまり九日になりけりといへるをうけてさく歌也さて聞

人おもへらくなそかくのいへるいかに不堪也とて余りたゝ詞也今すこし歌らしく有  
 へきそといふされと船君の案しめくらしてよしと思ひさためていひ出られたる歌を  
 いかにわろく思へととてさつえもこそまひねとてみきつゝめきわひてやみぬと也ひ  
 ねり出すの出てなるをまふり出すやうの意にてからうしてやうくによめるをい  
 ふまひへと疑ふらくのまひねの寫誤なるへしまひへといふ事さゝなれすまひの妙壽  
 本に誣字をかける其意あてそならぬ事をそなりとわしいふ也今もよしと思ひ入てよ  
 まれし歌をわしとのいひかたしと云意也つゝめくのゆらにいとす事のとしくを  
 されく一口つゝいふ事にてすなちかたへを憚りていひまふさま也さゝやくと  
 うふに似たりさゝやくの小聲にそといふ事也

よそかに風なみたかけれいとよまりぬ  
 二日雨のせやます日ひとひよすむらみ佛どの

けふの雨さへ降そへの此所にとままり暮しなは夜をかけて佛神をいのり明せりとい

ふ

三日うみのうへきのふのやうなれいふねいたさすかせのふくこと  
 やまねいきしのおみたちかへつこれよつけてもよめるうた  
 ぞよりにてかひなきものいれちつもるなみたのたまをぬかぬなり  
 けりおくてけふくれぬ

海上のあらなみ昨日にかえらねの船いたさすと也さて此岸の波立かへるといふのた  
 つかうへにたつこゝろにてさるの風やまねの波もまざるをいふ常たちよりて歸る波  
 をいふこのこと也消るか上に消るを消かへるわきにわくをわさかへるなどいふ格に  
 て俗にも熱かへる靜まうかへるなどいふ詞也されとかへるといふかたまゝ波の縁  
 なれの波の立歸るといふの消かへるなどに差ひて歸るをえたらけてかへるかうへに  
 歸る意にも自然になれり同じく紀氏の大井川行幸和歌の序に岩瀬とよもによるこの  
 しき心そ立歸ると書れたるのかへるくかたしけなき心又六帖にいかにして岩うつ

波の立かへりたくとたにも人にまらせんとあるもひまなく碎く心をいそんの序な  
 れのかへすくの心にてこれらたつうへにたつの心にとられすさるの今もかへる  
 くの心に見ても妨なしされとこいたちたつ方より歌轉したるあれの語のとわり  
 かなとさる也見わくへしさて其波のまなく乱るにつけてよめると也緒をそよりた  
 れど其かひもなきもののかく絶す落たまれる涙の玉をいえぬきとめすといふなみた  
 どいふに波をかけたるのこれにつけてもよめるとあるに知へしなみたの風やまで日  
 敷ふる事を歎く涙也緒をよりてといへるの船中よさるわさせしにそあらん玉の緒を  
 どいふもさら也もどゆひ打ひもやうのたくひ貴さいやしきかのくはとくふ手  
 つからよるへき事論なくいにしへのさま也大和物語に俊子に色こそめよりくみ何か  
 とみなあつけてさせ給うけりといひ枕草紙の半臂の緒ひねりはしむる日といひもど  
 ゆひよるといひ源氏に總角の君の糸より玉ふさまなと思ひわすへし此船中の兒女  
 ども長き日敷をさのみ徒にあるへきならず恐らくのさるわさせるをかたへに見馴て  
 そ其よれる緒もこの奇みたの玉をいえぬかすとよまれけん女とたにいへるさる手

わさせぬものなからん世にの緒をよりてかひなきなどあるを見ての誰もやかてさる  
 かたにそ思ひとりぬへきさらての此初句いとつきなきもの也同じ事も緒をいよると  
 もかひなきとか緒のありどもかひなからんとかいふやうの意へならぬまうけてよ  
 めりともいふへし緒をよりてかひなきもののとあるのかくよりてもかひなきといふ  
 にて只うのさのみひきかれぬこちすやあて次なる小津の泊にても妹かうむをつの  
 松原と枕におかれたるも例の見るものを用ひられたるにや前にも曉月夜いと面白け  
 れと云うとけしきをいひて詩をの謠ひし事をきかせ昔土佐といひける所お住ける女  
 此船に交れりけりといひて皆土佐に在し人なからかのれまきて其國の守なりし事を  
 まらせ次にも此泊の濱にのうるのしき貝石をどおばかり云うといひてやかて人との  
 おり立て拾ひし事を思ひせ神の心のある海にの歌の猶としめに有へきをたの歌の  
 こゝろにまかせて聞せたるを猶此さまの書ふりのみにして大やういとて有へき限  
 りをといひすさてきまらぬ人のさてありねとまで書あされたるか此記の心也けり  
 さてこそ千歳をわたりて其眞をまゐる人稀也けらし深く心をやりて察せずあるへか

らすさてけふもあまるまゝに暮たりといふ

四日おちとりけふ風雲のけしきえないたあしといひてふぬいたさ  
すなりぬえかれともひぬえずにかみかせたすこのかちとりハ日  
もええからぬかたる成けり

穢取いとくをとつ日の風雨さのふの風波の如きけしきの見えぬとけふの風おひ雲ゆ  
き却てゆたんならす漕出へからすといひてとまれりまかるに終日おたやかなりし  
也此穢取のおのか職分なるてけの事もええかきまらぬ役またす也といふ片時も早  
くと神佛をさへ祈る中にかくよき日を徒にせるをむつかりてかくとしたあくいひの  
のしれるのやかて翌日その風におひてたしなめられし面目なさをつよめたる例の也  
はなこたのちをくを口調にまかせてはなとたといふにてなのたお轉せる也やう  
やうの語のやうやくといえるに同じく是もうのくに轉せしにてみな同韻のかよへ  
る也となり物の眞端をいふ稱にて山とな棒とななる水の出とな寐入とななといふ

類かそへ難し人面に隆起せるを鼻といひ樹抄に發露するを垂といふなどみな此意也  
さて何と重ぬる時の其語活きて勢ひを得る例にて終にとなたのきはひてきひし  
き意につかひ來たれるもの也かたるの其もと四体不具なる者をいふより出たる稱に  
て癩疾の者をいへるも其意同じ彼身體不具なるもの正座する事あたえずそはみ傾  
く貌あるより片居といふ尤畢賤の者に多くさるゝ孤獨にして養ふ人なければちまた  
に出て物を乞より打まかせて乞見の稱とさへなれり後おのたゝ不具なる者をのかた  
のといひて乞見のみをかたるとよひ別てりかたのちももとよりある語にてかたへと似  
たる事也かたはの事の今辨せすまた頑愚の人をも心の不具なる方より轉してかたの  
といふこのかたるなりけりすなわちそれにて今かたのものやくにたゝすこしぬ  
けなどいふ也畢意不具ある者の世に廢れて物の用にたゝぬより去れ人をのりいやし  
むる言となれりし也伊勢物語にそこにありけるかたる翁板敷のまたにそひありきて  
とあるも今の鄙言に腰ぬけ親父などいふこゝろ宇治拾遺にかやうのかたのちなんて  
う僧綱にのはるへきといへるもかやうのやくにたゝすといふ也打つけに乞食といふ

に非すわきまふへし

このとまりのをまにいくさくのうるはしきかひいしなとれほか  
りかゝれいたむむがしの人をのみこひつゝ船なるひとのよめる

よするなみうちもよせなんわかこふるひとわすれかひたりてひる  
えん

まことに此濱邊に今もいろくの貝石多くなつかしわたり也皆かり立て拾へる  
を見て我兒もをらり同しさまにものせんをとかの母などのよまれたる也船なる人の  
よめるとさらにいへるにて余の人の濱邊お遊へる事あるしさる面白き濱つらに數  
日舟かゝりしてあらんに女をさなきものゝさら也誰の人かゝり立て物せさらん况  
やけふしもひねもすに波風なきたらんをやもとより論なき事なれのかたへお見せて  
委しくいとさる也諸注たゝ貝石を見やりて思ひ出るとするものゝ誤れり心を用ひて  
見るへしよする波よ同じくの戀ふる人をわするゝ貝をも打よせなんさらわれも共

にかり立て拾ひんをと也

といへれいあるひとたへすして船の心やりによめる

わすれかひむろひしもせしきたたまをこふるをたにもかたみとれ  
もえんとなんいへるをんなこのためよいたやをさなくなりぬへし

此歌を聞て或人悲しみにたへすして心やりによめるといふ船の心の舟底をいふ也さ  
るを船中のおもひをやるにかけて船の心やりといふこれ濱へにわたりていへりよ  
しや波のよせたりとも忘貝をの吾とさらお拾ひしもせし彼其わすれかたき白玉をの  
戀慕ふをたにせめて形見と思えんといふ玉や貝や同し渚のものなれのやかて亡兒に  
たとへていへり兒を玉にたとふる常の事おて俗にも玉のやうなる子といふゆり萬葉  
に山上憶良の兒を失へる時の長歌に和我中能産禮出有白玉之吾子古日者云く源重之  
か同し愁ひにあひし時歎きてもいひても今のかひなきを蓮のうへの玉とたになれら  
つは物語に玉のひかりかやくをのこをうみつなどの類舉るにたへす文集哭三崔兒一



詩掌珠一顆兒三歲髮雪千莖父六旬豈料汝先爲異物一常憂吾不見成人一また玉とい  
えねと傷二小女子一詩に纒知三恩愛二迎三三歲未辨二東西一過三一生二などあるも外なら  
す唐も大和も昔も今も子を思ふの哀情露もかへらさうけりされ二此兒女のため  
親も子めきておろかになりぬといふさる二の忘貝を拾ひて忘れんといひ又拾てすして  
わすれぬをかたみにせんといふきとみなをさなさまさな言也さるをみな子の爲に  
といひて親稚くといへるかいみしき也

玉ならずもありけんを人いはんやされともふかほよかりきと  
いふやうもあり

入此歌をきゝて玉にのわらす有けんものをといひ落さんやされともまにかほよかり  
しといひたすくへき方なきにあらす也親のよくめに白玉なといへれとまかひ玉と  
も見えさりしとや人いせんされとも命終の時顔色うる二のしかりしか一眞更三に玉なら  
すともいひすて難きに非すやさる死相によりてこそ人間善惡の眞實もあらはるれと

いへりまゝかほの今いふまに顔也頓死のさまに見ゆれ二の常に變らぬ顔とせのさこそ  
麗二のしかりつらめ抄に臨終之時色黒者墮三地獄二赤白端正者行三天上一など大論にも侍  
るにやと云り抑この愛別の悲しみより筆をたてられし二此日記おれ一此亡兒の事すへ  
て六所までまかもなかしく二くるされし中おわつかに舉出られし一此章のみされ  
のこの悲みの千すか中より喜びの一つを取二出られたる也人の親の子にねけるた一愛情  
の引方にむかひてそのあしきを二のまる事なし況やほとにつけて賢かしく一かいなて三醜  
からぬ二のよにもすくれておほゆへし一さらん親心二のよしと思ふ限りを書つくすとも  
猶わくま三し二さ一わさなるをやいにしへ佛法さかんにして賢となく愚となく信つ従せさる  
人しおけれの尤此すちまか二れる事といさ一かのほまれといへとも世にたふとみう  
らやむ事の二つ三あ二當時のさまをまりてかく書出られし心の程をくみえるへし今一  
の眼にと二まりて忘れかたき死顔のみめよかりしにつれても其心たてあしからさう  
し事をさへかたはらかすめ出二てこれたに世にもとまら一のいとせめてのまわさ也忘  
れかた二く口惜き事多かれとえつくさ一と末のとちめにか二れたるをこ一に併せて思



しせずこれかれたかひに國のさかひのうちのとて又古今序にこれかれえたる所えぬ  
どころ互になんあるかといへるは是と彼をまかどさすにて今どたかへり混すへから  
す畢竟同意なる論なきものからかきとかるさにて其えたらき懸隔のたかひ出く  
る事也めもとるくの見わたしの遙かあるにて當時の語也歌の意ゆけどく行過ら  
れぬの此をつの岸つゝさきる松原也といふ妹かうむのをといひ起す枕のみされと玉  
たれのなといふにたかひて妹かうむどおけるまへに打へてのとやさたらん朝け  
のさま見えわたりぬ

おくいひつゝくるほとにふねとくこけ日のよきよともよほせいか  
ちとりふなこともにいばく

みふねよりたほせたふなりあききたのいてこぬさきにつなてはや  
ひけ

機取のさかり入浴もいそかぬうへに風の心もいふかしけれたゝひく綱にまのせ

やるをとくこけかゝる日よりいかて忘るふんど催したてられて機引をほし其船子  
ともに傳へていそく御舟よりいそげと仰のくれたれるそさらの朝北の吹出ぬさきた速  
く引ゆけ其綱手とる子等と陸路に向ひてよのふ也今吹いつるとやてをまらて日のよ  
きにとくこけなといひのゝしるにあくまておろかしささま見ゆめりやかて俄に打か  
へてかれかいふまにく慎み従ひて機取の心の神の御こゝろ也なといへるみな俳諧  
のいみしき也朝北のわたしたに烈しくふく北風をいふ其風の出こぬまにとやくさるへ  
き方に漕つけんと也さきにも機取ら北風あしといへど船いたさすどあり

このことそのうたのやうなるいふちとりのたのつがらのことえな  
りふちとりいふつたへにわれうたのやうなる事いふとにもあらず  
きくひとのあやさくうためきていひひつるかなとてかきいたせれ  
はげにもみそもしあまりなりけり

この機取の自然の詞かてひたすら歌のやうにいとんとの心かまへにもあらずた、是

をかたへより歌らしくおかしと聞とりて書出して見たれにけに五七の調にかなへり  
どて興せる也うつたへに其語の本うつに虚にてたへに延也之へはすきとち心へな  
とのこへなかうつたへといひかたきよりうつたへとなれりさるの物のからにな  
りたる意より出てたどへの器に満たる物を打わけて残りなきさま也俗にさつとりと  
んどなどいふにあたりて一むきなる意となれり

けふなみなたちそとひとくひねもすにいのるさるしありて風波  
たすいまいもめむれあそふところあり京のちがつくよる  
こひのあまりにあるわらひのよめ

いのりくるもまよふもあやなくもめをうたになみとみゆ  
らんといひてゆくあひたにいしつといふところのまついらたし  
るくてもまよとほし

日の上きにとりいへるものゝさすかに機取のわやふむにみそれて風波おたやかなれ

と祈念する也さて京の近つくといふうれしさにわらひさへ歌心ふきりてそゝるまよ  
めるといふ歌のうへに悦ぶ意の有にのあらず今日波なたちそと終日いのりくる其ま  
るしの風間と思ひをるを鷗さへしもわやにくに又浪とみえしめてとかく小心をなや  
ますわやなきわさかなといふ見ゆらんか見えすともあるへきを何にみゆらんと  
也たにのみ其ものを強むるてにををきれいつくにかくも大かたさのらぬ事也後世  
さへといふに似たりと惑へるころよりこれをしも重なるかたに疑ふ事なかれかさ  
まともふのかさまとおもふ也おもふのまのこふかれていひなれし古語也鷗の海上お  
むれ浮へるさま必一むきに列りて脊の方よりの灰色に見ゆれと真向に向ふ時さまと  
に一ひらの浪に似たりと云り石津の高師の北に連りてはるく打ひらけたる松原の  
さま今もかさりなく面白さわたり也

またすみよしのわたりとこきゆくあるひとのよめ

らまみして身をもどりぬるすみの江の松よりまきにわれいけ

り  
 今立かへり此住の江の松をみてこそ身の齡のはともまりぬれまか年へぬと思ひし松  
 よりも我のさきにいたくふりまさりけりといふ松の縁のむかしのまゝのけしきにて  
 おのれの老くつをれて白髪とさへなれり也この六年さき下向の時みられたるにあ  
 たりていそれたりといふへけれとまかのみにあらし昔紀氏和泉の任にてあられし  
 時常に見馴玉ひつらんに其後古今集の序にも高砂住江の松も相生のやうにおほえど  
 はやく老の述懐をこれによせてかゝれたるなどとりましへておもふにさきくをか  
 けてかくのよまれたるなるへし

こゝにむかしへひとのをひとひるたときもわすれぬをよめる  
 すみの江にふねさしよせてわすれなきをありやとつみてゆく  
 へくとなんうつたへにわすれなんといふあらてこひしきこゝちさ  
 しいやすめてまたもこふるちからにせんとなす

二句六帖また一本に船さしよせよとあるに従ふへしまかし六帖にの結句ゆくへさど  
 わり謬也歌のこゝろの明らけしむかしへ人のいにしへ人といふにひとしく當時の語  
 也近世此へを濁れるの謬也いにしへのへに同じく元の如く晴ふへしさて忘草つまん  
 どのいへどこのひたすら忘れをんとにのあちてさりし日より一日片時わすれえね  
 の戀つかれてくるしきこゝちをまとしやすめてさて又再び戀つらんためちから  
 草にせんとなるへしといふ

かくいひてながめつゝくるあひたにゆくりなく風ふきてこけと  
 くさりへきそきにききてほとくさうちをめつゝかちと  
 りのいそくこのすみよしの明神はれいのかみそかしほしきものを  
 にはすらんとはいまめくもの

かく打なかめつゝ漕ぐるほどに彼昨日より風雲あしといひて機取の恐れしとやてつ  
 ひに催巻てへ今そ吹出たるに物より烈しけれのこけとくまりへにのみ吹もとし

てすて打えまらんとす也さるを打えめつへしと打まかせて船のまどさにいへり  
ゆくりなくのゆるやかならぬにて急卒なる事となれりまかすみやけき事のかもん  
かりにわたらぬより思ひかけぬ意を得て不意の字などあてたりまりへしそきの當時  
の俗語と見ゆ今云ぬとまさり也はどく其きのまてせまれるをいふにて多くの危  
きかたにつかひなせりさて機取いとく此住吉明神のさきくよりまると例の神そか  
しかく御船をさへきりとめ給へるの又かのはしき物それをすらんなどいへる今めく  
ものかといへりおとすらんまての機取の詞也とい今めくもの九言の記者の語也  
今めく今の世めくにてむさど物ほしむ世のねしなへにいひこなすを當世めくもの  
かなと其なめき詞を聞とめていへる例の也

さてぬきをたてまつり給へといふにまたかひてぬきたいまつ  
るおくだいまつれともいふ風やまていやふきにいやたちに風波の  
あやふけれいおちとり又いそぐぬきに御こころけいかねい御ふ

ぬもゆかぬなりなほうれしとれもひたふへきものたいまつりたへ  
といふ

機取のいふに従ひてぬき奉れとも少しもまるとなく風いよくふき波いよくたち  
まさりて今の船もくつかへるへら危ふけれの機取又云幣はかりの物にの神の御心と  
まらぬの御舟進まぬ也猶悦ひ玉ふ物奉り玉へと云御心のいかねのゆかねのとある  
本に従ふへしものらのもの最の意にてそれに延の言のそへる也ものへもといひ  
これぬよりものらとなりてその一むきなる方につかひなれたり今も一向やまざるに  
てすこしも止め也ものら風やまてといひて又風波とらけたる重なりてみたりに聞ゆ  
れと彼ことわりをかへりみぬ古文の常にてそれやかて常語のうへにかきへれと却て  
的實の見ゆるもの也

又いふにまたかひていかにせんとしてまなこもこそふたつあれた  
たひとつあるがみそたいまつるとてうみようちはめつれいと

くちどしきれいうちつけにうみはかゝみのことなりぬれいある人のよめるうた

ちいやふるかみのこゝろのあるうみにかゝみをいれてかつみつるかないたくすみの江わすれくさきしの姫まつなといふかみにハあらずかし

又いふに随ひてさらいかゝのせん眼をかり大切なるものなけれどそれもこそ二つおれこのかりなきたゞ一つある秘蔵の鏡なれとも是奉る也されハ忽ち風波をさまりて海も鏡の如くなりぬといふ歌の意神の御心のある海に鏡をしも打入て納受ありやいなやまつ試みけるといへり見つるかなハ鏡にてみるとかけし縁也されハ此歌ハ打めつれいどくちをしといふまでの心也打つけに海ハ鏡のとなりぬれいといふハ一首の後の心にてさるゝ次に目もうつらハ鏡に神の心を見つれといふにてうけたり鏡をこめつれハ鏡の如くなりぬと鏡をかさねいひて引となたれハ交勢な

れハひたすらに書おるせるものからなは深意ある事ハ別録に委しくいへり引合すへしもと鏡の如しハ海上たひらかに一点の波なく磨きすませる鏡の面に似たるをいふ今ハその余波を立さわきて更に然らねと鏡をはめしといふ縁よりいひつらねて只大波のまつまれるをさも書なせる文章也上に海をかゝみと誰か見さらんとよまれし眞景との同しものあらざるを辨ふへしさて常になつかしく仕のえわすれ草岸の姫松なといひとやし歌などによみおらすやうの神にハあらずかきりなく物むさはる荒ふる神におとすかしとあてめにくまふ方にいへりちのやふるの枕自然に此歌にたきて力あり住江といへとやかて石津黒崎などの名にたかひてさく打つけのやさしさをいふわすれ草岸の姫松のいふもさら也さて上の械取の詞に住吉の神などいとしてこの住吉の明神のとよつゝかにいせせたるもこのやさハめる語にあたりて其けらめわらせんとなりいたくハ強くわたるの語にて事のさひしきに用ふるハもと也それより身おいたき意となれるか常あるより又身にまむ事になりてなつかしうやさめく方にみいへりいたいけいたとりなともとたらくを思ふへし源氏の明石に入道の前栽の

事をいへる所につくれるさま木ふかくいたき所まさりて見所あるすまひ也又落標に源氏の君の宣旨のむすめを明石へ下し玉へる所になれて聞ゆるをいたしとおはすをど猶多しみな一つのしき意のへ也

めもうつら／＼か／＼みよかみのこ／＼をこそい見つれかちとりのこ／＼のいかみだ御こ／＼なりけり

めもはなす打守りて鏡に神の心をと見定めつと實の鏡の如くなきわたれるをよるこへる意をわざと引とつしてと／＼機取のいへるま／＼なれりやかて其機取の心こそ神の御心也けれといひ落せりさるの物はしき時のみたりに波風を起して人の寶を奪ひ玉ふのかの機取の欲深き世なれにどかたらぬ身しき御心きめりといふ上に岸の姫松などいふ神にのあらずかしといへる首尾也諸本みこ／＼なりけりとあるに従ふへしめもうつら／＼のつらつら見るといふに今一さの見てむ方のつよき語にてわきめもふらすといふにあたれり今俗にうつら／＼ねふるなどいふたとひなき方に混す

へからす萬葉廿に奈天之故我波奈等里母知天宇都良宇都良美麻久能富之伎吉美附母安流加母とあり此意の此うるのしき撫子の花を手に取持て打まもり見る如く君にまたしくなれ参らせんをどこひねかへるをいへるにも其意を知へしさて船中こ／＼らの人の命のためにいたとひ千金萬珠きりとも何ぞ投るにたらんや况や一つの鏡をやさるを身にかへても惜きものにいひなせるの例のにて前にも小豆粥煮さる事を口をしと書るに同じく露も口惜からぬ事を却てまかいへる滑稽也たとへこのなたに不用なるもの或の敷にもたらぬ物などを人乞ひん時その身にかへてもいみじき物なれとそこちらんにも與ふへしなど余りに輕き事なれりわさとおもくいひあすわされの類ひ今の意をへに似たり眼もこそまかくといへるも今のたこれに二つなき鼻をかけんなどいへるにて更に實面に聞へき語にのあらず恐らくの當時いひあれし謔ならんうつはの俊隆に父母まなこれにふたつありと思ふほとに云くと獨子をいつくしむをいへるも猶大とけたる方にてこれ彼物語の躰裁なるを聞えるへし其外も例の神をかしはしき物そおとすらん云々幣にの御心のゆかねの御舟もゆかね也猶うれしと思ひた



さふへきもの云ふされの打つけに海鏡の云ふなと意も詞もどもにわされ興した  
るをみるへき也かつ其あされにつきて其實わらのれ其さす手にとるをかりなるまこ  
とに奇異の文といふへしさてもとよりの實録にハ一箇の鏡おそへて一首の歌を奉る  
やかてに感應あらたに納受ありし神慮のほどを忝なみ敬ひ謹みて記しおかれつらん  
事論なきもの也仰くへし

六日みをつくしのほどよりいてなにはつきて川流りにいるみな

ひとくねんなたきなひたいにてとあてよるこふこと二つなし

の船酔のあえちのまのたほいこみやこちがくなりぬといふぞ  
よろこひてふなそこよりがしらをもたけてかくをいふ

難波津きてハ諸本難波の津をきてとあるに従ふへし今日ハ川尻に入たれハ人々の悦  
ひ類ひなき也川尻ハ都を川上としていふ名にて堀江河の入口にてすきち江口のは  
とり也遊ひなとさへつとひてよに繁華の地なれとはしめて都のおもかけたちぬへし

額に手をあてハ今かしらをかへて悦ふといふ也うやまひ祈るやうの時にいふハ  
或ハうやまひいハ或ハいのりつりて其をかむ手を額にあつる也混すハからす諸本  
女をさなきものどあるに従ふへし額ハ手をあつるハそろくかたにてわかきものに  
似つかハしき也さて接するに淡路のたうめハ紀氏につかへし老女にて決めて愚かし  
き方の人なるへしすへての書あつかひまか見ゆめりさるをたひくとり上てとかく  
いとるハにさく人腹をさけしならんされハいつも紀氏おのかうへと並へて同じ愚  
かあるつらに書なしてたこれかたきとせられし也九日の所ハ翁人ひとりたうめひと  
り物もハのしたててひそまりぬとおのれどもにわかめてかき廿六日にもわきてた  
ハれたるはてうちての歌を淡路のたうめといふ人のよめるとかハれ今ハまた淡路の  
名を此日ころめちかくおもなれし淡路島にいひかけてさておはいことさへたこれて  
書り大子の第一の女子をいふ也俗に惣領娘といふにて一の姉をさす大姉といえんか  
如し今も愚かしき人ハ老弱をどハす兄君姉君などよハわかひる事あされの常也大  
和物語に大膳のかみ公平のむそめともあかたの井戸といふ所に住けりおはい子ハ

さいの宮に少將の御といひてさふらひけり三にのたりにけるの備前守信明またわか  
男なりける時になんとしめの男にまたりける云々又故みやを所の御姉おはい子にあ  
たり給ひけるなんいとらうしく歌よみ玉ふ事もおとうとたち御息所よりもまさ  
りてなんいまずかりけるなどあるみな大姉をいへりさて船底よりかしらをもたけて  
といへる船系ひのさま今たに可笑<sup>オカシ</sup>みあり其時其人をまらひいかとかりなりけん思ひ  
やうつへし

いつしおといふせがりつるなにをかたあしこきをけてみふねきに  
けりいとれもひのほかなるひとのいへれハ人々あやしがるこれか  
なるにこゝちなやむふなきみいたくめてふな忍ひきたうへりし  
みおほにいにすもあるおなといひける

いつかのといとも心もどなかりつる難波津の其昔へに御舟つきたりといふ漕をけて  
の漕遊るにて漕わけといふに意のかとらす紀氏の歌に深へなるまこも刈そけとある

そけに同し今の漕よするまゝに蓋の打なひくさま也いとるかと思ひしを今日の汀  
の昔へにさへ來たる嬉しさといへりさてよひましき人のよめれたれもあやしかる  
中にかの船君同し病者を相おれみてとの外にめていそく船酔してはけ給ひし御  
かはつきにの似合給とすもあるかきといへり御顔などゆかめいへるの大于とかけり  
し首尾よてすへて調も詞も狂せるかなは凡ならざるを見るへし

七日けふ川きりにふねいりたちてこきのほるよ川の水ひてなやみ  
わつらふ船の乃ほることいとかたしかゝるあひたよふなきみの病  
者もとよりこちくさきひとにてかうやうのことさらにもたらせり  
けりかゝれともあいちたうめのうたにめてみやこほこりにや  
あらんからくきてあやしきうたひねりいたせりそのうた  
きときてハ川のほり江の水をあさみふねもわか身もなつむけふか  
なこれハやまひをすれハよめるなるへし

川尻に入て見れの水かれて船すみかたなく行なやみ漕わつらふと也漕のはるの  
 今漕也のはる事いとかたしの末をかけていふ也さるほどにかの病者の船君性骨不器  
 用なる人にて歌よむやうの事のもよりまらされとも淡路たうめの昨日の歌にいた  
 くめて、かつ都近くなれりし悦ひのはこり心にうきたてるけにやあらんよへより案  
 しめくらしして怪しきえせ歌やうくは拈り出せりといふ都はこりて俗に日向誇ヒナウホコなど  
 いふはこりにて我物とえて樂しむやうの意也こちくしきの源氏の朝顔に聲ふつ  
 かにこちくしくとあるなとかもふに不骨にしてやさたまぬをいふへし歌の意來へ  
 き限りを來つめていつひに堀江川の水なきに逢て船の行なやめるのみか吾身も共に  
 泥みわつらふと也さきの歌の御舟きにけりをうけてきときていふ此日ころ涙の  
 高さに漂ふをくるしみ海の深さ又沈まん事を恐れ來つるに物みなさのまり有て今日  
 のかへりて其水をこひ願ふにいたれりといへり船君病にわつらひをれの歌に我身も  
 なつむとよめるなるべしと也  
 ひとうたよことのあがねはいまひとつ

とくとれもふふねなやますいわがために水のこころのあききな  
 りけり  
 るべしこのうたいみやこちがくなりぬるよるまひまたへすしてい  
 へるなるへしあいちのこのうたよれとれりねたきいえさらまし  
 のととくやしめるうちによるよかりてねまけり

片時もとやくと思ふ其船をかくも行なやましむるの我を思ふ水の心の淺き也といへ  
 り結句諸本なりけりとあるお従ふへしなるへしとありての歌のうへと、のとぬのみ  
 ならず前後の詞のなるへしといふよかさなりて文の調もみたる、もの也さて此歌と  
 もみな水なきを恨み歎きたるをれと實の都はこりの悦ひに堪かねて歌まらぬ身さへ  
 おのつから吉多きと也此歌のとあるの後の一首のみをさすにあらす二首をこめてい  
 へりさて其歌みな淡路の御の歌に及ふへくも非すねたさかななまなかいとて有へか  
 りしものをと悔しかるうちに日も暮て寐まけりといふ嬰兒の泣涙入したるさまに何  
 事も思ひとめすかろかしう罪なきと也淡路の御の伊勢の御少將の御などの御にて

いとまかしつきいへる例の也是ふならへて船君をまかしつきて愚か人に書なせりす  
へておろかしき人の世に落しむる方より却てふしわかめ又さかしきをいのりいやし  
むるなどうらうへをゆく滑稽の常也

八日なほ川のほとりになつみてとりかひのみまきといふところ  
とよまるこよひふなきみれいのやまひねこりていたくなやむある  
ひとあきらかなるものもてきたりよねしてかへりことすとこと  
もひそかにいふなり飯ほしてもつゝとやがうやうのことところ  
くじありけふせちみすれいどもちひす

川尻に入て三日にもなれ、水たにあらはとく都へも入へきをなほ川のはとりにな  
つみてけふもやうく鳥飼の御牧まで来てとまりぬとわやくなる心いられとい  
ふ例の病の衰老の持病也舟酔ならん今宵ねこりてと書へからすあさらかなるもの  
の當時魚類の新らしきをいふ稱にて今なまものといえんか如し大膳式加茂祭齋院陪

従の食料の内に青柏アヲシラ六俵ロクハヤ鮮物シモノ菓子カシなど見えたりもあさらかあさやかかなくふ  
かきの反にてももの、あやめの打つけによくわかる、をいふさる中に物にのわさやか  
といひ魚肉の類をのわさらかといひおれたり今も紅魚の頭尾鱗目の鮮明なるをいへ  
りこゝに魚の名をいへる下の諺にゆつりて也さて其よき魚に米つかせせるを見  
て下部どものわるさの陰口ふこれかまことに飯粒イヒキして鯛つるとやいふなるへきといへ  
りとやといひすて、言のたらのぬひそかにいふの語勢也さるのいさゝかなる物の  
かへりによき物を得たる時のたとへあるに今の實ふよねして實に鯛を得たる打つけ  
ををかしといへり今の世にもいふとわさ也いひはひひつふの音便也古事記に以  
飯穂イヒホ爲餌エサなど見ゆめりもつゝ一本もつるとあるによるへしさてもつるのさか  
めてたひつるの寫誤にてせひとありしを老の一字に誤てる也定家卿本奥書に不讀  
得トク所トコロ多只任タカシ本書也とあり妙壽本にも古代之假字猶ナカ料リョウ未ナシ憲臨ノミ寫有ナシ魚魯  
手後見テノミ察サツ之而曰とあるをも思ふにまことに魚魯のたかひなりけり字の字のそのか  
み多分用ふる假字也又これのよき物を得るのたとへにさるなれ何のあれと鯛をい

ふへしおなしたとへに麥飯<sup>ホ</sup>て鯉<sup>ニ</sup>つるともいへり鯉も鯛もまきの中にて<sup>レ</sup>家上のものなれ<sup>ハ</sup>也たましくもつとよふ細魚あるによりてもつくとせるのまひてもつ<sup>ノ</sup>字をよまんとせるのみのさかしらにてもとより鯛鯉等の佳魚ならて<sup>ハ</sup>樽へのうへのとわり引たかひてかなのさるなどのかへり見さるもの也かうやうの事どころ<sup>ノ</sup>にわりの前にも昨日釣し鯛に米をとりにかけて云々又鯛もて來たりよね酒などくる云々などある同じさまなるをいへりそこにもかゝる事猶わりぬと書る照し見て鯛なる事を思ひ定むへしさて八日の例の潔齋なれ<sup>ハ</sup>此えたる鯛をもたうへすと也

九日こゝろもとなきにあけぬからふねをひきつゝのほれと川の水なけれいあざりにのみあざこのあひたまわたのとまりのあがれのところといふところありよねいとなとこへいれたまひつ

此心もとなきの前の廿日の所にくるしく心もとまけれのさあるに同じく心ならずといふにて落居ぬかたち也大和物語にみづから只今まゐりてといひてさどにくるま

りにやりて待ほと心もとなし枕草紙にこゝろもとなき物といふ所に人のもとにとみものぬひにやりて待ほといひ物見にいろさ出て今や<sup>ノ</sup>とくるしう居入てあなたをまもらへたるこゝろといひたるみき只心のうちつかぬをいふ後世此語を安りにつかひなし或のなほつかなきこゝろ或の物くるをしき意とせるなと其外くさ<sup>ノ</sup>いひなすいたく違へる事也もとより嬉しさうへにもいふ事にて同じ草紙にまどにうれしき事によへ侍しを心もとなく思ひわかつてあんとあるもかの喜而不寐の類ひにて嬉しさに心のうこきて落つさねられぬをいひ空徳の忠念に心もとなくめつらしく物し給へれ<sup>ハ</sup>よろこひなから出わひてとあるもおど<sup>ノ</sup>のまれに入給へるを北の方のめつらしみて歡ひそゝろさてえおち付給ぬをいへり今も落居てねられぬより明ぬうちから綱手ひかせてのはれともあやにくにけふ八日のかり雨ふらていよ<sup>ノ</sup>水なけれ<sup>ハ</sup>船すゝりて進み難さ也るさ<sup>ノ</sup>居去<sup>キ</sup>にて地をすりてゆくさま也わけぬのら<sup>ハ</sup>明ぬさきのら明ぬうちからといふ意にて紀氏の歌に陸花咲ぬるをみて時鳥また鳴ぬからまたるへら也をしむから慈しきものを白雲の立なん後<sup>ハ</sup>何こゝちせんなどある

もなかぬさきからをしむうちからといふ也和田の泊と鳥飼と渚の間をれの今の牧方  
 おあたるへし妙注わかれの所と過所にて船役をとる所也といへれとさるをわかれの  
 所といふ事にはつかなし考ふるにこの物をめしわかれといふわかれにて水陸の旅  
 人に貨食をひさきてわかれとよとふよりわかれの所といひならせる俗稱をわさ  
 と例の書出られしなるへし實にあかれとよふ所の名ならぬわかれの所といふまじ  
 き也石津といふ所鳥飼の御牧といふ所などの如くわかれといふ所と書へし石津の北  
 鳥飼の御牧の所といひての開えぬか如し猶いにしへと名所をさしてまかしの所と  
 いひし事奇きにあらねど當時のまからすおさまふへしさて此和田の泊の難波と京と  
 ふりわけの半途をれの尤旅客の驛場にして今も牧方の宿の漁商軒をつらねて賑とへ  
 り官途のむかし思ひやるへし今淀川往來の夜舟をめてに此泊より小舟漕出で酒餅の  
 類ひ其外のたへものもて來たり何そくらぬのは是くらへなとけうとく呼ひて浮麻の  
 夢をおどろかし其ふおたにひやひしてひさきものすめり俗これを呼てくらぬか  
 の船といふくらへの所ともいふへきのやかてわかれの所にて今古自然の符といふへ

しもしこの被食つかの意ならずの船の人を呼上るのわかれにて陸よりわかれとよ  
 ふゆゑの名にてやわらんいつれにても有へしさて其泊に船をとめて米魚など求め  
 られたるよやさらのおこなひつゝ諸本おくりつとあるお従ふへきか此おこきひつに  
 の猶一つの考へ侍り熟案の後まゐるすへし

かくてふねひきのほるよなきさのおんといふところを見つゝゆく  
 その院むかしをれもひやりてみれはれもしるかりけるところなり  
 志りへなるをかにハ松の木ともあり中の庭にハ梅花さけりこゝに  
 ひとくのいえくこれむかし名たかくきこえたるところなり故こ  
 れたかのみこの御ともよ故ありえらのなりひらの中將の世のなか  
 よたえてさくらのおもさるハたるのこゝろハのとけからましとい  
 ふ歌よめるところなりけり

渚の院の渚の岡にありて文徳天皇の離宮にて後惟喬親王に附属し玉へる所也かの岡

今の淀河をはなる事數百歩に及ぶといへども昔の川筋の岡にそひて流しより渚の岡どのいひけん其流に臨みて彼院のありし也されど其荒たるさまを船中より見やりつゝゆく也さるの庭なる梅花を見歌にも梅かゝの匂ふといひはの聲の寒さなどいへるに其間ちかさはとをえるへしさてかのさかんなりし昔を思ひやりてみれはさまさま面白かりし所といふその昔の事實を語る人への語るになしてかつくゝるし出せる中に朝臣の惟喬親王の御供お從ひ奉りて歌よみ玉ひし事世に名高かつ其歌の心にてかの面白かりし時世のさま思ひやるおたらしむるもの也諸本みこのみどもにてとあるに従ふへして文字なくてのきこえず歌の意櫻といふものたえて咲事なき世あらずしかの春の人の心のいとものとかかならましをといふこの連日御符たゝして野山の花のさきちるを見めぐり玉ふほどのあわたゝしさをせめても歎したる時めき心也諸注待をしむ心つくしを長閑からすといへりと思へるのたかへりまか一本二本の花に打むかひたるやうの意ならんやのとけからましといへるの心盡しの反に非といそかのしきのうら也くはしくの古今にとけり又三句まとのなかりせのなるをさか

さらのどかゝれたるの巴札を女とまで書かすめてすへていみしくたれたる日記の中おさのかりの古歌を正しく書んも似つかのしからねのかの聞されの方にちしておさとのまわさ也前にも天の原を青海原とかへ山の端にけてを波立さへてといひきはし詩をも皆歌ひかへ時文の名をも文時と書まさらのしすへて其外の事の上も實面シヤクなる限りのおとくたかのしめさるのなし其たかひめに從ひておそれにもおかしくも書なせるのいひさならずといへども落る趣意の俳諧也とあるへし伊勢物語にも古今の歌をさまゝいろへるにみたれんと思ふ吾ならさくにを乱れそめにしとし春日野のけふのなやきそを武藏野とあらため其外世人のためよを今宵ためよ歎く子のためを祈る子のため鶉とあきて年のへんを鶉と成て鳴をらんかと引たかへて書る大和物語にも古今に人を心おおくらさんやのとあるを人に心をとほし後撰今何てふかひかあるへきとあるを今のかひなく思はゆるかな年ふれわかろかみも白川のをぬと玉の我くろかみなど書まといし源氏に朧月夜に似る物そなきと打かへて吟したるたくひ猶擧るにたへす又歌のさなから詞書をあらぬすちに引たかへ或の作者

をあらためなどみな同しあされ也古來此類ひを異説と意得て深きゆゑあるやうに思へるなどいふにたらずすへて物語草紙などいへる類ひのみならずたしかならざるもの也中にいまと正しきもあれとそれなほおもていふかとも定めぬかたをかりたる名也この日記のさまも准らへて知へし

いま興ありあるひとところよにたるうたよめり

ちよしたるまつにいあれといよしこの歌のさびさひあひいふかりけり

此文きのめて傳寫の誤なるへく見ゆといふ歌よめる所也けりいま興ある人所に似たる歌よめりとつらなるへきものあらんや更に文をなさるを聞知へし又いつれの歌か今よめるにあらざらんまた興ある人との興する人といふにやさるもおほづかなく又何も此歌のみ興ある人にかゝらんごとく其すちたゝさる事也よりて按するにといふ歌よめる所ありけりいまも興ありある人所に似たる歌よめりと原本にのりつ

らん此ありあると重れる上のありを脱して後今も興ある人云とぞなれるを其文意とほらすと見て又も文字をも省きたる後人のさかしらあるへしこの試みに申ふき侍る也さて興ありのおもしろき也上昔を思ひやりて見れり面白かりける所也といへるむかしをうけて今も興ありといふ空穂の春日詣におもしろく興ある所の此御社になんある又桂わたりに興ある所をもて侍りなどあり實に今昔の跡のとまらぬとこのわたり岡のつかさのたゝすまひより渚村のかさりつらなれる松のけしきもいとからかうしく此川を以第一の勝景にして猶おもしろき所也同し世に在なかられくれて見られけんいかはかりならん歌の意大やう年ふりたるを松なれの千世へたるといふのみ聲の寒さのかの朝臣の高調の世に遺れるを漏むにかくるゝ寒松の風によせたりさて其身にまむ聲の今もかいらすといふ紀氏の家集をみて惠慶法師一卷に千の金をこめたれの人こそなけれ聲の遺れりといへるに似たる意へ也けよさやかなる寒玉の響の千歳の今にさこゆ况や其世に在てをやうつば物語に左大将のおとゝまして哀かりめて玉ひて御わこめ一重ねをきて御うなしの寒けなるにかゝれいそ云々みな人



をうつむ紅葉ののちぬも風ふく松と思ふなるへしとあるも仲忠侍従のあまたか中  
にすくれたる琴の音を寒松の風によそへてはめ出たるなど引合すへしさて朝臣の歌  
よみせられし三月半にして花の盛ならんに寒き頃ならずさるをいにしへの聲の  
寒さよめるの只其風調の秀たるを形容せるなるを今しも二月としめて實景の寒  
風身にさむけれの所に似たる歌よめりといふさるの自然ふ此語の今日の寒景にあへ  
りといふ也もとより今日のけしきより思ひつきて聲のさむさといひ出たる事論な  
けれといふしへを主意にたてし歌のうへよりさして今日の此所のさまにものらよる  
どのちしに所に似たりといふかたになせり大よそ其所に打向ひてよまんさるに誰  
の歌か其所に似すあらんされゆゑなくして所に似たりと更ふことわるへきに  
のあらざる也

またあるひとのよめる

きみこひて世をふかやとの梅花むかしのかにそなほよほひげると

いひつゝそみやこのちかづつとをよろこひつゝのほる

そのかみなれまらせし君をこひつゝ年へにける此院の梅花の猶今も昔の香に匂へ  
りといふ君をこひての宿のあるしをこふといふにて惟喬のみこそさせる也まか歌よみ  
しつゝのほりくるにかひし都のちかつくをよろこふといふ

かくのほるひとくの中に京よりくたりしときにみな人子ともな  
かりきいたれりしくよゝて子うめるものともありあへるみな人船  
のとまるところよ子をいたきつゝわりのほりすこれをみてむかし  
の子のそゝかなしきにたへずして

なかりしもありつゝあへる人の子をありしもなくてくるあかなし  
とといひてそなきげる

此文のかくのほる人々の中に至れりし國にて子うめるものとも有あへるとつゝさて  
さて立かへり京よりくたりしときにか皆人子ともなかりさといへる文意也ありあへ

るのこゝちにてのゐるもありといふのかりの事也さていたれる國にて産りといへん  
くたりし時になかりしにまれたる事なるをかくいへるに吾のくたりし時にのわりし  
をといふ事聞ゆめりさるのやかて歌の意也もとよりなかりしさへもあるものになり  
て歸りくる其人の子たにゐるをかへりて我の有つるもなくなりて歸るか悲しき也  
この文上およるこひつゝのはると書もあへすいひてそ泣けると落着するに打つけ  
の悲しみをますもの也妙壽本みな舟のとまる所にとあるお従ふへしこゝに人の字あ  
けての上のみ奇人おかさかりてまかもことわりたす

ちよこれとさきといひぬあらんかやうのことともうたひこのむ  
とてあるよもあはるゝしよるこしもこゝもたもふことになへぬ  
ときのおちとさきよひ宇土野といふところよとさき

諸本かうやうのとうたこのむとてあるにしもあらざるへしと有に従ひて二つのも文  
字をふくへし上のも文字の調をさまたけ下のも文字の義をなさすさて悲しむにつま

てのかがやうにいつも歌とよみ出る事必歌このむ心おまかせたるすさひならず大やう  
もろこしもこゝも思ひに堪ざる時やむ事を得すしていひ出るむさどか聞りといふ詩  
序に情動<sub>ニ</sub>於中<sub>ニ</sub>而形<sub>ニ</sub>於言<sub>ニ</sub>之不足<sub>ニ</sub>故嗟<sub>ニ</sub>歎<sub>ニ</sub>歎<sub>ニ</sub>歎<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>嗟<sub>ニ</sub>歎<sub>ニ</sub>歎<sub>ニ</sub>歎<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>不足<sub>ニ</sub>故詠<sub>ニ</sub>歌<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>古  
今序にも世中にある人どわさまけきものなれいこゝろお思ふとを見るものさく物に  
つけていひ出せる也なとみつからいおれたりされとこゝのもいら子と思ふの情より  
出たれい今もろこしもとさくれたるの前にひける樂天の亡兒を傷める詩などの意を  
や打つけに思おれけん當時かたのら白詩をもておそのぬ人なけれおそらくの紀氏  
も是等をふみていおれ又さく人もやかてそれお思ひとりしからん宇土野の今の鶴  
殿也

十日をいふことありてのほらす

十一日あめいさゝかにふりてやみぬかくてさしのほるにひんかし  
のかたに山のよこほれるをみて人よとへいやいたのみやといふこ

れをきよて人々をかみたてまつる山をきのをしみゆるれしきこと  
あきりなし

さしのはるとあるの細手を引やめて棹にてのはる也さて東にわたりにて男山見えたり  
よこはれるのよこふれるにて横ふるをのこへいふ也ふりの標にて宮ふり手ふりなど  
のふり也ふをほといふの音便にて畢竟よこさまといふに其意かはるとなし古今によ  
こほりふせるさやの中山とあるも横ふりふせるにてみな横さまに靡きたる山のすか  
たをいへり八幡の宮とさしてをかみ奉るさる並ひに山崎の橋の遙に見え初たるけに  
いかどかりかいうれしかりけん此橋のそのかみ三大橋の一つとしていちまるき事世  
にまる所也今の橋本の宿其跡也といふ

こゝに相應寺のほとりよといふねどとよめてとかくきたむるこ  
とあり此てらのきしほとりに柳たほくありある人此柳のかけの川  
のそこにくつれるをみてよめうた

さゝれなみよするあやといふあややきのかけのいとしてたるかごと  
みゆる

相應寺のはとりのやかて山崎の橋と也山崎の橋を大渡の橋也といふ説の誤れり所  
の大やうかたらねと大渡の橋の南北にかゝり山崎の橋の東西にかゝりてさて相應寺  
の橋の西つめの南にあり其橋の本に船をかけて京入の用意を何くれとかりまらふ  
るを定むる事といふ空穂に内に参り玉ひてきため玉ふとあるにつけて云々又公卿大  
臣のため申侍りなん枕草紙に家あるしつほねあるしと定め申へき事の侍る也などあ  
り今俗お相談といえんか如しさて此寺の南崖に多く柳を植つゝけたるか水底にうつ  
りて一筋のみとりにみゆる川さしのかしきを或人のよめると也岸はとりの今にてい  
岸のはとりといふへき當時につめてかく躰言にもいへりしきらんうつは藤原の君に  
川はとりになかめくらしして云々又御琴わそとすきくとて川はとりに玉へりなどみ  
な川はとりとあるに岸はとりともいえん事推てまらる川へ岸へといえんか如し歌の

意さゝなみの此岸によせなす水のあやをみれりうつり靡く其影の糸にておろ出す機  
とり也といふ結句の見ゆり見るとある本に従ふへし見ゆともうくる事あれと今のみ  
るの謬也

十二日やまをききにあり

十三日なほやまをききに

十四日あめふるけふ車京へとりやる

十五日げふくるまゐてきたりふねのむつかしきにふねより人のい  
へにうつる此人のいへよるこへるやうよてあるしきたり

歸京のあす十六日と定めたれども船より出たらん所せくむつかしけれりわたりの  
来る人の家より物せんとしてまつ船あかりしてうつられし也むつかしき今むさつくむ  
さくろしなどいふにていさきよきのうら也それより深よからぬ心のさま或はけしき  
の上につつしてゆくさへに聞なざるれを意とへりひとつ也と知へし源氏の清木に

ゆかしからぬ人のさまをいへる所に父の年ねいものむつかしけにふどりすき云々ま  
た夕顔に五條通の事をむつかしけなる大路のさまともいへりこれらむさくろしうき  
たなき事也枕草紙にむつかしけなるものといふに鐘ものうら猫の耳のうち鼠のい  
また毛もおひぬを巢の内よりあまたまろし出たるなと有にてあるへしさて此人の  
家大によろこひて馳走せしといへりやうにてとおほめさいふの謙辞也

このあるしの又あるしよきをみるにうたてれもほゆいろく  
るへりことすいへのひとめていりにくけならすあやふなり

あるしの人からのよきうへおもてなしもよきといふを同し語なれり重ねいへる例の  
書きまにて又どうけて下のあるしよきといへるに上のあるしよきを聞せたり下  
のあるしりやかて悦へるやうにてあるしまたりといへるあるしにて響應也さるを甚  
きのとくに思ひているくのもの返禮につかすといへりうたてり何にまれ意外に  
いつるをいふかもとにて思ひの外なるをいふ委しくいふに辨せすこらにてりは